2021 年度

千葉大学アカデミック・リンク・センター／附属図書館

自己点検・評価／外部評価報告書

2022 年 1 月

報告書　目次

はじめに
目次

第 1 部　外部評価委員会報告 ･･･ 3
　1.　開催日時・次第 ･･･ 4
　2.　委員名簿、出席者 ･･･ 4
　3.　議事要旨 ･･･ 4
　4.　アカデミック・リンク・センター／附属図書館 外部評価委員会 総評 ････ 7
　5.　評価結果 ･･･ 9
　6.　質疑応答・意見交換要旨 ･･･ 23

第 2 部　自己点検・評価委員会報告 ･････････････････････････････････････ 33
　1.　開催日時・次第 ･･･ 34
　2.　委員名簿、出席者 ･･･ 34
　3.　議事要旨 ･･･ 35
　4.　評価結果 ･･･ 38

【資料編】

第 3 部　自己点検・評価／外部評価 資料

第 4 部　外部評価委員会 報告スライド

表紙写真：附属図書館本館 N 棟 4 階（2021 年 9 月撮影）

はじめに

千葉大学アカデミック・リンク・センターは、千葉大学における教育改革のためのコンセプトであるアカデミック・リンクを推進するために、2011 年 4 月に附属図書館、総合メディア基盤センター（現在の統合情報センター）、普遍教育センター（現在の全学教育センター）の協力の下設置された。当初は、アカデミック・リンク・センター長／附属図書館長のほか、実質的にアカデミック・リンク・センターの業務を専ら行う、上記の二つのセンター所属の兼務教員を中核とし、これに特任教員が加わって教員組織を形成するとともに、附属図書館事務部が学生部（現在の学務部）の協力を得ながら、教員と職員の協働の下、多様な活動を展開してきた。とりわけ設置から 2014 年度末までの 4 年間は、運営費交付金特別経費プロジェクト分というというプロジェクト型の活動に対する予算措置の下での活動ということもあり、実証実験的な性格の活動にその大きな特徴があった。それゆえ、センターとしての最後の外部評価報告書は、プロジェクトとしての最終報告書という形をとった。

本報告書は、このプロジェクトとしての最終報告書に記述された後の活動を対象とするものである。2015 年度以降のアカデミック・リンク・センターの組織としての変化の特徴は、プロジェクト型の組織からより安定的な組織への移行という点にあり、その過程において、教育関係共同利用拠点としての認定（2015 年 7 月～）、運営費交付金機能強化経費による教員 3 名の配置（2017 年度からの 5 年間）、教育 IR 機能を担う教員の確保など、センターとしての組織整備がなされた。それは同時に、アカデミック・リンク・センターの機能を学習支援から教育・学習支援へと広げていくことにほかならなかった。また、当初アカデミック・リンク・センターが対象としてきた教養教育から、学部、大学院の専門教育へと支援の対象を拡大してきたこと、情報通信技術の展開に即して「デジタル・スカラシップ」という概念を日本で最初に導入したこと、教育・学修支援専門職の養成に着手したことなどをその特徴として挙げることができるだろう。

また、今回の自己点検・評価、外部評価においては、アカデミック・リンク・センターと附属図書館の活動を一体として評価を実施した。附属図書館の機能としては、教育研究に必要なコンテンツの整備とそれに基づくサービスの実施があるが、コンテンツ整備においても、機関リポジトリで公開してきたコンテンツを IIIF 対応のデジタルアーカイブとして展

開し直したことは、アカデミック・リンクの「デジタル・スカラシップ」の枠組みでの取り組みであるとともに附属図書館のデジタル化の取り組みでもある。また、附属図書館が利用者に対して直接的におこなっているサービスや活動は、教育・学習支援としても捉えられるものであり、ここでもアカデミック・リンク・センターと附属図書館の活動の線引きには現実性がない。一体とした評価の実施はそのような理由による。

自己点検・評価の実施にあたっては、アカデミック・リンク・センター／附属図書館に所属する教職員のみならず、学内の兼務教員の先生方、図書館委員会の構成員である先生方にもご参加いただいた。それは、アカデミック・リンク・センター／附属図書館の活動がその組織内に閉じたものではなく全学を対象としたものであることを考慮してのことである。また、外部評価委員をお引き受けいただいた、岩永委員長、岩切副委員長、大隅委員、野末委員、美馬委員、木下委員の各位におかれては、お忙しいところ時間を割いていただいたこと、また我々の活動に対して、それぞれのお立場から厳しくも暖かいご意見を頂けたことに心より感謝申し上げる。改めてここに記すことで、私が持ち続けている深い感謝の念を表したい。

2015 年 3 月の評価報告書の「はじめに」において、最初の 4 年間のまとめは「始まりのおわり」に過ぎず、これからその真価が問われると書いた。また、これまでの評価に甘んずることなく、日々進化していきたいとも書いた。この 7 年間の活動がそのようなものであったかどうかはまさにこの評価に表れている。いただいた評価をもとに、2022 年度から始まる国立大学法人における第 4 期の中期目標・計画期間において、持てる力を結集し、さらに新しいフェーズを切り拓いていくことを我々の目標としていきたい。皆様方の引き続きのご支援、ご叱責をお願いする次第である。

2021 年 11 月

千葉大学附属図書館長、
アカデミック・リンク・センター長

竹内　比呂也

第１部

千葉大学アカデミック・リンク・センター／附属図書館

外部評価委員会報告

1.　開催日時・次第

日時　　2021 年 9 月 24 日（金）　14：00～17：10
場所　　千葉大学附属図書館本館　対面（I 棟ひかり）＋オンライン（Zoom）

議事次第

0．アカデミック・リンク・センター／附属図書館見学（対面出席委員のみ）
　休憩
1．開会（14：00～）
2．アカデミック・リンク・センター／附属図書館報告
3．質疑応答・意見交換
4．委員による評価についての意見交換
5．講評
6．閉会（17：10）

配布資料

資料 1 自己点検・評価／外部評価 資料
資料 2 自己点検・評価／外部評価資料 別添
資料 3 外部評価委員会名簿
資料 4 外部評価委員 評価シートまとめ
資料 5 自己点検・評価結果
資料 6 千葉大学 ALC/附属図書館 報告スライド
資料 7-1 千葉大学アカデミック・リンク・センター評価委員会規程
資料 7-2 千葉大学附属図書館外部評価委員会規程
資料 8 自己点検・評価／外部評価 資料の修正

2.　委員名簿、出席者

アカデミック・リンク・センター／附属図書館 外部評価委員

岩切　正一郎　国際基督教大学学長
岩永　雅也　　放送大学学長
大隅　典子　　東北大学附属図書館長、大学院医学系研究科教授
野末　俊比古　青山学院大学図書館長、アカデミックライティングセンター長、教育人間科学部教授
美馬　のゆり　公立はこだて未来大学システム情報科学部教授
木下　聡　　東京大学附属図書館事務部長

千葉大学関係者

竹内　比呂也　アカデミック・リンク・センター長、附属図書館長
檜垣　泰彦　　アカデミック・リンク・センター副センター長（准教授）
山本　和貫　　アカデミック・リンク・センター副センター長（准教授）
岡田　聡志　　アカデミック・リンク・センター副センター長（准教授）
鈴木　修二　　アカデミック・リンク・センター副センター長、附属図書館事務部長
鈴木　宏子　　附属図書館利用支援企画課長
綾部　輝幸　　附属図書館学術コンテンツ課長

陪席者

安西　尚彦　　附属図書館亥鼻分館長、自己点検・評価委員
小林　達明　　附属図書館松戸分館長、自己点検・評価委員、アカデミック・リンク・センター兼務教員
伊藤　彰一　　自己点検・評価委員、アカデミック・リンク・センター兼務教員
前田　早苗　　アカデミック・リンク・センター兼務教員
織田　雄一　　アカデミック・リンク・センター兼務教員
國本　千裕　　アカデミック・リンク・センター特任教員（特任准教授）
姉川　雄大　　アカデミック・リンク・センター特任教員（特任講師）
藤本　茂雄　　アカデミック・リンク・センター特任教員（特任講師）
我妻　鉄也　　アカデミック・リンク・センター特任教員（特任助教）
武内　八重子　附属図書館利用支援企画課副課長
大園　岳雄　　附属図書館学術コンテンツ課副課長
磯本　善男　　附属図書館利用支援企画課利用支援企画グループリーダー
池尻　亮子　　附属図書館利用支援企画課アカデミック・リンクグループリーダー
米田　奈穂　　附属図書館学術コンテンツ課学術コンテンツグループリーダー
佐々木　智穂　附属図書館学術コンテンツ課学術コンテンツグループ専門職員
丸茂　里江　　附属図書館学術コンテンツ課亥鼻分館係長
村上　雅史　　附属図書館学術コンテンツ課松戸分館係長

3.　議事要旨

委員会に先立ち当日午前に、館内施設の見学を行った。オンラインで出席する委員に対しては、事前に簡易な見学動画を提供した。

議事に先立ち、センター長／館長挨拶、出席者の紹介、配布資料の確認を行った。続いて委員長および副委員長選出を行い、岩永委員が委員長（本会議の議長）、岩切委員が副委

員長に選任された後、審議に入った。

竹内センター長／館長から、アカデミック・リンク・センター／附属図書館の評価期間における活動概要についてプレゼンテーションによる報告が行われ、続いて質疑応答・意見交換に入った。質疑応答の前に岩永議長から、質疑応答および意見交換については Zoom による記録のうえ要旨を報告書として取りまとめる予定であること、その際に委員氏名は明記しないため、自由に発言いただきたい旨の説明があり、了承された。
質疑応答・意見交換の後、千葉大学関係者は記録担当者を残して一旦退席し、委員のみで評価について意見交換を行い、評価資料の各項目について総評に記載すべき事項や委員会としての評価指標を策定した。委員による意見交換終了後、千葉大学関係者が席へ戻り、岩永議長から意見交換を踏まえての講評があった。
評価シートについての訂正は別途事務担当から確認があること、後日 A４で２ページ程度の総評を委員長がまとめて委員に確認のうえ提出する予定であることが確認され、閉会となった。

4.　アカデミック・リンク・センター／附属図書館 外部評価委員会 総評

千葉大学アカデミック・リンク・センターおよび附属図書館は、従来の図書館機能に加えて、多様な学習空間とコンテンツ、教職学生によるサポートを有機的に組み合わせた学習環境を確立し、「考える学生の創造」「『生涯学び続ける基礎的な能力』『知識活用能力』を持つ学生の育成」を目的として、千葉大学の教育・研究を支えている。
本委員会は、センターと附属図書館の 2014 年 9 月～2021 年 3 月の 6 年半にわたる活動について評価を行った。評価項目は「管理・運営」「評価期間中の特記事項」「人的支援」「空間整備」「コンテンツ」「教育基盤の支援」「地域・社会連携」「他機関連携」の 8 項目である。

本委員会は、先進的な活動を計画的に実施・発展させており、また一大学内の利用者に向けた活動に留まらず、我が国の大学教育、大学図書館に対する貢献をもたらしている、アカデミック・リンク・センターと附属図書館の 6 年半の活動を高く評価する。
その上で、本委員会は、センターと附属図書館に対して、以下のような今後の展開を期待する。

- 新型コロナウイルス感染症への対応については迅速かつ適切に行われてきたことから、この経験から何を学び、それをどう活かすのかについてまとめておくことが望まれる。ニューノーマルに向けて、さらに学生のニーズに対応したサービス体制を確立することを期待する。

- 「人的支援」における、学習・研究支援の連続的・体系的な展開や、分野・領域に配慮した支援内容のきめ細やかな設定、さらには支援人材としての学生との協働や教育関係共同利用拠点での教職員のスキルアップなどは高く評価できる。一方で、人的支援や人材など、支援に関する文言が統一されておらず、概念の整理が必要である。

- 空間については、学習行動等の調査分析を行い、改善を図っていることを評価する。入館者数については、2016 年度をピークに減少傾向にある原因を調査し、今後の取組みに繋げられたい。

- 学生貸出平均冊数が全国平均より低い点について、図書の利用促進に向けた様々な取組みがされていることは評価に値する。一方で、資料を借りることなく館内利用で学習が完結しているのか、あるいはマスとしての蔵書の存在感が後退しているのかといった、ラーニング・コモンズなどの学習環境の充実が関連するかも含めた原因の分析が望まれる。

- 電子資料について抱えている課題、特に電子ジャーナルの価格高騰については全国的な課題であるが、利用促進や利便性の向上といった対策も含めて、今後の対応について考えの提示が望まれる。

- 学習支援活動について、学生の学習成果の面から評価することは、学生が使う大学施設や学習機会など様々な変数が考えられることから難しい。しかしビッグデータの解析といった新しい分析手段も出てきていることから、自身のミッションを踏まえた活動改善のためのフィードバックとして必要となるデータを議論して、他の機関でも使えるような新しい調査・評価方法の構築が期待される。

- 地域・社会連携については、大学図書館として一般的な範囲の連携は行われている。さらに展開するならば、全体の活動に対して少ない人員で何に注力するかという点から、アカデミック・リンクの行う教育・学習支援などの目的と照らして、学生・教職員と地域との双方のニーズを充足する連携を検討することが望まれる。

- このような新しい組織を立ち上げ、日本のリーディング・オーガニゼーションとして先端を走る組織だからこそ、これまで目指してきたこと、できたこと、できなかったことを共有し、これからの社会の変化にどう対応していくかを積極的に発信していただきたい。

千葉大学の図書館とアカデミック・リンク・センターが、日本において新しい大学図書館のモデルを提示し、発展し続けているというこのレベルを維持するために、施設の維持・改善はもちろんのこと、その理念やミッションの共有を一層進めて、人と組織の基盤を固め、成長していくことを期待する。

5.　評価結果

評価指標　A：非常に良好である　……　十分な活動がなされている
B：おおむね良好である……　改善の余地がある
C：やや不十分である　……　改善の必要がある
D：不十分である　……　大幅な改善が必要である

１．管理・運営　　評価：A　（自己点検・評価：B＋）

■評価コメント

- よく組織されており、予算措置もしっかりしていて良い。
- 学外への発信、学術成果の共有も高度になされている。
- 附属図書館とアカデミック・リンク・センターが融合し、「考える学生の創造」が適切にめざされている。
- 「知のプロフェッショナル育成」をめざして整備された 5 部門体制は効果的に運営されている。
- メディア授業の実施に関する臨時サイトの開設など、コロナ禍のもとでの学生、教職員へのサポート体制も十分にとられている。
- 国立大学法人としての規模に鑑み、附属図書館の常勤職員数 23 名（非常勤職員を加えると 60 名）で効率的な管理・運営体制が取られていると思われる。また、連携するアカデミック・リンク・センターには 5 名の特任教員を含め 8 名の教員が配置されていることによって、教育・研究と図書館サービスの有機的な連携に関して、より先端的な取り組みを機動的に推進する運営が可能である点は高い評価に値する。
- アカデミック・リンク・センターが設置された当初から、附属図書館と一体となって、理念を尊重・堅持しつつも、学内・社会の状況などに応じて活動を進化あるいは深化させてきており、わが国における大学図書館（を中心とした教育・学修支援）をめぐる先進的・先駆的なモデルを提示し続けている功績は高く評価すべきである。とりわけ、2017 年度より、アカデミック・リンクをめぐる三つの「概念」を展開・強化して、五つの「部門」としたことは、学部学生から大学院生までを対象として「学習」から「研究」に至る体系的・連続的な学び（成長）を支援できる体制が具現化されたとみることができ、大きな意味を持つ。また、アカデミック・リンク・センターと附属図書館とが協働し、職員と教員とが協力して運営にあたっている点は、大いに意義がある。
- 学術情報基盤に関する国や大学の方針に沿った明確な理念・目標が定められ、適切に管理・運営されている。施設の整備、予算の確保は、大学執行部の理解を得ながら、順調に進められており、大学にとって投資に見合うだけの成果を十分にあげている。また、学内外への広報活動も活発であり、先進的な活動や研究の成果を積極的に発信

することで、アカデミック・リンク・センター／附属図書館のアピールにとどまらず、我が国全体において学術情報基盤を整備していく上での大きな指針を示すとともに、全体としてのレベルアップに貢献している。

■改善に向けての提言

- 改善というほどのことではないが、コンセプトとしての「アカデミック・リンク」と、施設・機能としての「アカデミック・リンク・センター」と、事務組織としての「アカデミック・リンク・グループ」の関係が、外から見ると最初よく分からない印象を持つ。
- IR 部門との連携など、さらなる改善の余地はある。
- 大学総経費中の図書館運営費の比率が国大平均を下回っていることの影響が心配である。
- 附属図書館とアカデミック・リンク・センターの Web サイトの情報は充実しているが、いずれもスマホ対応（レスポンシブル）でない点は改善された方が良い（学生のほとんどはスマホで世界を見ている）。SNS の活用についてはアカデミック・リンク・センターと連携して行われているが、動画コンテンツの利用等、さらに改善できると良い。防災対策に関して BCP や連絡網の設定についての記載が無かった。もし設定されていないのであれば対応すべきと考えられる。
- 一定の成果を達成できているという意味においては、明らかに改善を要する点は見当たらないが、電子資料を中心に高騰が続き、優秀な人材の確保が容易でないなど、大学（図書館）を取り巻く環境が厳しさを増す状況下では、とくに予算・人員面が充分であるとまでは判断できない。今回の資料に主に記載されている投入に関する指標に加え、産出さらには成果に関する指標を含めた調査・分析を行い、データに基づいて、予算の拡充や配分の変更、人員（ポスト）の増強や配置の工夫などが行われることが期待される。
- アカデミック・リンク・センターのウェブサイトについて、情報提供の側面が強く、ユーザにとって使いやすい、利用したくなるような、魅力的なサイトにするような改善が必要。
- ほとんど前例のない状態から新しい組織を整えてきたこれまでの経緯から、現時点では、管理する組織がやや入り組んで複雑になっているように思われる。今後は、明確な理念にふさわしい、すっきりとしたわかりやすい組織構成を目指して、改善・調整していただければと思う。たとえば、全学組織としてのアカデミック・リンク・センターのもとに、附属図書館をはじめとする学内の関連組織を一体的・有機的に統合することなどが一案として考えられる。

■その他中項目に対する評価・提言・コメント等

- アカデミック・リンク・センター専任教員が配置されているのは素晴らしいと思う。大学全体の中の具体的な教育・研究内容、担当の業務がどうなっているのかを知りたく思う。
- 「千葉大学の本棚」といった、コンセプトとネーミングは優れている。
- アカデミック・リンク・センター教員の専門性に関して不明であったので、会議の折に伺いたい。大学の HP から附属図書館やアカデミック・リンク・センターへの誘致が見えないのは残念である。

２．評価期間中の特記事項　　評価：A　（自己点検・評価：B＋）

■評価コメント

- 「アカデミック・リンク松戸」の実現によって懸案の問題点が解消し、未来志向、ICT 対応の環境が整ったのは素晴らしい。
- また、CHORUS 機関ダッシュボード・サービスの契約、DOI の付与を介してのリンク構築など、ユニヴァーサルで永続的なシステムの導入は高く評価できる。
- 「アカデミック・リンク松戸」により、いわゆる「松戸格差」の解消が図られたことを高く評価する。(全面運用はコロナ禍で遅れているようであるが･･･)。
- Covid-19 対策に関する諸対応（館内利用の制限、オンライン学習ポータルサイト、学習支援デスクのオンライン化など）は迅速かつ適切であった。
- アカデミック・リンク・センターでの「支援の実践知」に関する実績を活かし、園芸学部を擁する松戸キャンパスにおいて「アカデミック・リンク松戸」が始動した。新型コロナウイルス感染症対策に関して３館とも館内利用制限、郵送貸出、サービスのオンライン化等の対応を行った。オープンアクセスに関して、「CHORUS 機関ダッシュボード・サービス」の契約等含め、積極的な取り組みを行った。
- オンライン（ネットワーク）の活用などによって、場所や時間にかかわらず利用できるアカデミック・リンク・センターおよび附属図書館のサービスが増えていると思われるが、一方で「空間」としての施設・設備が果たす意義も間違いなく存在する。今般、松戸キャンパスにおける分館改築に伴って「アカデミック・リンク松戸」が設置されたことは、キャンパスを問わず、大学全体として教育・学修支援の理念・活動を実現・実行できる基盤整備が進んだという意味において、大いに評価すべきである。ニーズ調査などを含め、適切な検討・協議を経ながら計画が進められた点も大いに評価できる。
- 「アカデミック・リンク松戸」について、本部から離れたキャンパスにおいて園芸学部という単独部局の構成員（主に学生）に対して、全学的な理念に基づいて本部キャンパスと同レベルの学習・情報環境を提供していることは高い評価に値する。新型コロナウイルス感染症への対応は、学生のニーズをくみとって迅速・適切に対応してき

ている。特に、サービスおよびコンテンツのオンライン化においては、学習支援デスクのオンライン化など他大学の参考となるような先進的な取り組みを行っている。オープンアクセスへの取組についても、もっとも早く機関リポジトリを立ち上げた伝統を継承して、我が国におけるトップランナーとしての役割を果たしている。

■改善に向けての提言

- アフターコロナ期のニューノーマルに対応したサービス体制を確立することが課題となろう。
- 「アカデミック・リンク松戸」の活動を、ここからいかに実効的なものとしていくかが問われることになる。引き続き、ニーズ調査などを含めて利用者の声も聞きながら、サービスの立案・実施を進めることが望まれる。
- コロナ禍の経験から学んだことはなんであったのか、それを今後どのように活かすのかについてまとめておくことが望まれる。
- 大学が研究データを管理するうえにおいて図書館の果たすべき役割が明確となっていないなか、全国の大学にとって参考となるようなさらなる取組が望まれる。すでに研究データ管理基盤の整備をはじめられているようなのでその成果に期待したい。

■その他中項目に対する評価・提言・コメント等

- コロナ対応も適切になされている。
- 図書館職員のテレワーク対応の工夫について当日伺いたい。

３．人的支援　　評価：A　（自己点検・評価：B+）

■評価コメント

- 教育支援のシステムが有効に構築、展開され、活用されている。
- 仕掛けと効果が連動している点も良い。
- 学外からも多くの参加者を集める ALPS セミナー、「1210 あかりんアワー」、ALSA の学習相談や EYR!などの支援プログラムは大きな発展可能性を有しており、コロナ後の展開も楽しみである。
- 新入生ライブラリーツアーをはじめとする初年次学生支援は非常に有効である。
- 学部生、大学院生の学習・教育の支援体制として充実している。ALPS プログラムが全国の教育関係共同利用拠点として支援人材育成に取り組んでいることは高く評価できる。オンラインツールによる自己学習の支援が進んでいることも、コロナ禍での対応として素晴らしいものである。
- 初年次生から大学院生まで対象を拡大し、「学習から研究へのゆるやかなつながり」を意識した学習・研究支援が連続的・体系的に展開されている点は、総合大学におけるひとつの理想形ともいえ、高く評価できる。分野・領域などにも配慮しながら、支

援の内容・形式もきめ細やかに設定されている。また、キャンパス（リアル）に加え、オンライン（リモート）での支援を拡充してきたこと、とりわけリアルタイム型のサービスのみでなくオンデマンド型のサービス（コンテンツ）にも注力されていることは、コロナ禍における対策という意味で有効であるのみならず、コロナ後にあっても、スマートラーニングの推進が掲げられているとおり、学生が「いつでも」「どこでも」利用できる可能性を拡げる点においても大いに意義がある。人的支援の提供側である教職員のスキルアップなどを可能とする研修プログラム（ALPS）は、学内外の部門・機関などと連携しながら実施している点、教育関係共同利用拠点の活動として学外にも開かれている点なども含めて、特筆すべき取り組みである。

- 人的支援に関しては、「自ら考える学生の育成」を目指して、学部学生向けの情報リテラシー教育や学習支援を、多彩なメニューを提供して、充実したものとしていることは特筆に値する。それに加えて、院生を対象とした研究・学習支援、教育・学修支援専門職の養成プログラムを、事前に詳細な調査・検討を加えたうえで、実施していることも先進的な取組となっている。これほど充実した人的支援を行っている大学は、少なくとも国内では他に例を見ない。また、大学の DX が広く求められる状況にさきがけて、いちはやく人的支援のオンライン化に取り組み、すでに一定の成果をあげていることも大いに評価できる。

■改善に向けての提言

- たとえば表 3-6（資料編 p.45）のような過年度の回答者数は、それ自体、多いのか少ないのか、あるいは期待値に対して十分なのか、分析・評価があったほうが良いと思う。
- 学習相談やEYR!等のような多様な試みは、学内外にもっと周知し、アピールすべきである。
- それぞれの取り組みにおいて一定の利用者数があることなどから、相応の結果が得られていると思われるが、今後は、いわゆる量的な評価に加えて、質的な評価、とりわけ学修・研究の成果にどのようにつながったのかにも着目し、サービスの最適化を進めることが期待される。
- 人的支援、支援、などの文言、概念、用語が統一されておらず、整理が必要。
- 長年の間、我が国の大学図書館において必要であるとされてきたサブジェクトライブラリアンを養成するプログラムを検討していただけるとありがたい。(「リエゾンライブラリアンとしての活動」（資料編 p.107）がそれにあたるか？）

■その他中項目に対する評価・提言・コメント等

- ルーブリック（資料編 p.71）は、他の分野でもそうだが、日本語にすると非常に読みにくい上に細かすぎて、扱い難い印象があるのだが、導入にあたって、教員や学生の

反応はどうなっているのだろうか？

- 評価に当たり「人的支援」という本項目名には違和感があった。中身としてはガイダンス、レファレンス等の教育・研究の支援である。
- 学生と協働する取り組みは、それ自体が学生の学びの機会となっているという点において重要である。
- 基本的学習支援のうち、図書館におけるガイダンス開催回数が、新型コロナ感染症拡大以前から減少している要因として何が考えられるのかご教示いただきたい。（他の情報リテラシー教育の充実によってガイダンスの必要性が小さくなったのか？）

４．空間整備　　評価：A　（自己点検・評価：A）

■評価コメント

- パンデミックによって「空間」の意味がすっかり変わり、期せずして、物理的空間とデジタル空間とに並行して取り組むことが必要となった。「スマートラーニング」のこれまでの取り組みが功を奏した形となったように思われる。
- スマートラーニングに対応した収録設備の更新は、コロナ下での遠隔授業実施体制の強化という点で高く評価できる。
- 調査に基づいた学習空間の設計と改善がなされていることも評価できる。
- とくに、「アカデミック・リンク松戸」の整備は、図書館の空間整備に関して特筆すべき仕事だと思う。
- 動画で拝見し、現代的な図書館に相応しい空間環境を整えていることを高くリスペクトしたい。環境が人の認知や情動に与える影響は計り知れない。とくにラウンジ内で自然音を流すという試みについては、ぜひいつか実際に伺って体験してみたい。「アカデミック・リンク松戸」へのリニューアルも高く評価できる。
- 提供されている施設・設備等については、利用状況などを踏まえれば、「学習空間」として一定以上の水準に達していると評価できる。学習行動・ニーズなどをめぐる質的な調査を含めて、利用に関する調査が種々、実施され、分析結果が改善に活かされており、一般に大学（図書館）において疎かにされがちな PDCA サイクルを丁寧に遂行している点は、極めて優れている。学内教職員を巻き込んだワークショップなどは、大学全体として取り組む姿勢を強化する意味でも、意義深いものである。
- 空間整備（建物の建築・改修等）においては、整備して事足れりということはなく、利用する人びとのニーズや潜在的な需要に応じて常に改善していく必要がある。千葉大学では、学習空間を改善するために必要な活動として、さまざまな視点・角度からの調査が実施されている。それだけでなく、利用者の学習行動把握のための取組を試行したり、インタビューできめ細かにニーズを把握したりと、改善のためのヒントを得る努力を尽くしているように思われる。また、学生だけでなく、教員・職員にむけても、教職員合同ワークショップを開催して、課題の共有と改善の提案を行っている

のも新しい試みとして評価できる。このようにして把握した改善ポイントを参考にしながら、各館においてひとつひとつ設備や機能を着実に改善している。千葉大学のアカデミック・リンク・センター／附属図書館の学習空間が図書館界で非常に評価の高い理由は、事前の綿密な分析と常に改善する姿勢にあることがよくわかった。

■改善に向けての提言

- 学生・院生の空間利用に関する要望について、インタビュー等が行われているのは高く評価できるが、得られた示唆や情報（資料編 p.88-89）がその後どのように活用されているのかがはっきりしない。
- 今後は亥鼻分館の整備も視野に入れるべきだと思う。
- 空間の利用方法についてのデータ収集方法について、またそれらのデータのプライバシーの問題、データのオーナーシップについての議論及びその考え方の公開が望まれる。
- 引き続き積極的にさまざまな試みを推進し、つねに改善する姿勢を維持していくことによって「成長する有機体」であり続け、これからも我が国の大学図書館をリードしていってもらいたい。

■その他中項目に対する評価・提言・コメント等

- コロナ以前の本館のみの来館者数の経緯をみると、2016 年度をピークに減少している。この傾向は評価者の所属する大学附属図書館でも同様であったと思われ、全国的に学生が図書館に来館しない傾向がコロナ前から生じていたのではないかと危惧している。ただし、亥鼻分館は異なる推移となっているので、どのような条件が異なるのか伺いたい。

５．コンテンツ　　評価：B　（自己点検・評価：B－）

■評価コメント

- パンデミックの状況にも対応できる電子媒体の充実は高く評価できる。
- 図書館所蔵コレクションのデジタル化、目録検索と画像閲覧の合体は素晴らしい。
- 紙資料の整理が進み、CURATOR 等のデジタルコンテンツの充実が積極的に図られた。
- デジタル・スカラシップの導入も有効であった。
- 受入図書冊数が 2015 年から 2020 年の間に 25%程度減少している点は、知の府としての大学附属図書館機能の観点から大きな懸念を感じる（ただし、他の国立大学附属図書館でも同様と推察され、我が国全体の問題である）。一方で、電子書籍タイトル数はこの 6 年の間に 11,000 タイトルの増加となっているので、受入図書数の減少分を補っていると考えられる。電子ジャーナルのタイトル数もこの間に 2,000 タイトル減少している。一方で、書籍をどのように配置し、手にとってもらいやすくするかについ

て、種々の工夫が為されている点は高く評価できる（留学支援棚、研究資料ナビゲータ、教員が薦めるこの 1 冊等）。同様の取り組みの電子版である「千葉大学の本棚」も重要と思われる。

- 附属図書館における資料については、もちろん貸出冊数だけで評価できるわけではなく、電子資料の利用状況などともあわせて総合的に検討する必要があるが、国立大学の全国平均と比べてやや開きがあることから、何らかの改善の余地がある可能性がある。ただし、大学における授業ひいてはカリキュラムにおいて資料の活用がどのように指導されているかといった点が影響していることも考えられる。学術リソースコレクション、学術成果リポジトリなど、デジタルコンテンツの作成・発信が着実に進められていること、コンテンツ制作室を設置し、いわゆる教材・教具を含め、教育・学修および研究活動を具体的に支援していることは、確実に評価されるべきである。「デジタル・スカラシップ」概念の提唱や実現に向けた取り組みなど、次代のモデルを提示し続けている点も着目に値する。
- 「学習とコンテンツの近接」というコンセプトに沿って、いわゆる「蔵書」の収集や整備を充実させるとともに、利用者の学習活動と「蔵書」とを近接させるためのさまざまな工夫がこらされている。c-arc や CURATOR によるコンテンツの作成および公開は、単なる収書にとどまらない、コンテンツ整備における大学図書館の新たな役割の手本となる活動になっている。cu-Books、新しい教材開発やレガシーコンテンツ再生プロジェクトなどの取組についても、その発展に期待したい。また、コンテンツ制作支援は、年々着実に設備や事業の充実がはかられており、図書館がコンテンツというキーワードをもとに、大学の教育活動を支援していくうえでの重要な活動になっている。

■改善に向けての提言

- 学生貸出平均冊数が、全国平均より上か下かはともかく、全国平均の数値自体の低さに驚かされる。電子資料を使うことが多くなっているからだろうか？　「図書館に求めている機能は、図書の貸出だけに留まっていない」（資料編 p.99）という分析だけで良いのだろうか？
- 電子ジャーナル類の価格高騰の問題への対応が現在から今後にかけての大きな課題である。
- 貴重な資料のデジタルアーカイブ化について、今後より推進されることが望ましい。
- 貸出冊数が全国平均を下回っている点については、授業資料ナビゲータ、研究資料ナビゲータ、留学支援棚、教員が薦めるこの 1 冊など、学習資源としての資料という観点から優れた利用促進の働きかけがすでに種々なされていることを踏まえると、これらの働きかけに対する認知度・利用機会を向上・拡大する広報的な活動（イベントを含む）を強化する余地はあるかもしれない。

- 電子ジャーナル、データベース関係について、抱えている問題、特に価格について今後どう対応するのかについての考えを示してほしい。利用率があまり高くない要因の特定、およびその対策についての検討が必要である。

■その他中項目に対する評価・提言・コメント等

- 文芸書の収集は基本的に全集のみ、ということのようだが、これは和書も洋書も共通でそうなのだろうか。
- コンテンツひいては教育（活動）のデジタル化は、今後いっそう重要になると思われる。一方で、コロナ禍でオンライン授業が拡大するなかで対面（リアル）の意味が見直されつつあるように、アナログのコンテンツひいては教育（活動）も依然として重要であろう。すでにブックツリーなどリアルな資料（冊子）の意味を考慮した活動を展開しているアカデミック・リンク・センターおよび附属図書館だからこそ、デジタルとアナログが適切に融合した展開を期待したい。
- 電子資料（特に電子書籍）について、利用の促進や利便性の向上をはかる余地があるように思われる。従来の「蔵書」と同じように、電子書籍を学習活動に近接させるような取組を期待する。また、研究データを「デジタル・スカラシップ」の概念のなかでどのように位置づけ、扱っていくかは今後重要なポイントとなると思われる。

６．教育基盤の支援　　評価：B　（自己点検・評価：B）

■評価コメント

- IR、FD とも有効に機能していると思われる。
- 学生によるシラバス・チェックは双方向的で面白い取り組みである。
- IR 活動とリンクして多くの調査を行い、その結果を適切に分析していることは高く評価できる。
- コロナ下でのオンライン授業の導入、Moodle の普及など、教育の ICT 化に積極的に取り組み、成果を上げている。
- 学内組織再編により、国際未来教育基幹の下で、教育の IR およびそのフィードバックのための FD・SD を連携した全学的な部署を置き、全学的な ICT 化の推進を図っていることは特筆に値する。LMS として Moodle をクラウドとして取り入れ、テクニカルサポートについて PC サポートデスクなどを置いている点も良い。
- 学習資源を持つ附属図書館と連携して教育・学修支援を行うアカデミック・リンク・センターが IR・FD・SD 連携部門を設置し、全学的な IR・FD と教育の ICT 化推進の機能を担う体制となったことは、大学における教育基盤を集約的・統合的に維持・強化していく点で有効であると考えられる。運用を進めるなかで課題も生じてくると思われるが、設立当初からコンテンツ提供基盤として LMS を運用するなど、当該業務における活動の蓄積を持つアカデミック・リンク・センターだからこそ、適切な解決の

方向性を見出すことが期待できる。調査・分析（データ）に基づく教育活動（コンテンツを含む）の最適化は、とくにコロナ禍・コロナ後の大学が抱える共通のテーマであろう。学修成果に踏み込んだ、調査・分析の取り組みを期待したい。また、ティーチング・フェロー制度や学生によるシラバス・チェックなど、いわば学生を信頼した意欲的な取り組みを開始していることも大いに着目されるべきである。

- IR の活動のなかで、各種調査の回答率の伸び悩みが課題となっているが、これはどこの大学でも苦慮しており、アカデミック・リンク・センター／附属図書館という一部局だけではなく、より全学的な観点から取り組むべき困難な問題である。FD や SD の活動状況は、標準的なレベルで行われており、今後も順調に発展していくと思われる。教育のための ICT 基盤の整備と運営については、新型コロナ禍に適切に対応することで、格段に進められており、運営やサービスが充実したといえる。これは、スタッフの迅速かつ集中的な努力の成果であり、その経験やノウハウを活かして、スマートラーニングの推進に向けて教育基盤をより確固としたものにしていくことが期待される。

■改善に向けての提言

- ティーチング・フェローは、業務内容を見ると合衆国における TA と似たもののように思われるが、そうすると TA は大学院教育の位置づけとしてどのようなものになっているのだろうか？
- 調査によっては十分な数の回答を得られていないもの（卒業生調査など）もあり、調査の有効性についてはさらに検討や工夫が必要となろう。
- 課外学習支援、オンライン／オフライン／ハイブリッドにおける支援のあり方、関わり方への整理が必要と思われる。
- 評価について、新しい方法の検討が必要。「新しい酒は新しい皮袋に盛る」ことが肝要である。
- 教育基盤の充実に向けて、アカデミック・リンク・センターが中心になって取り組む体制・組織を活かして、全学的な協力・連携をより一層進めていく必要がある。

■その他中項目に対する評価・提言・コメント等

- 新型コロナ対応については、アカデミック・リンク・センターが全学的な組織として位置づけられ、これまでの活動実績があったからこそ、限られた時間のなかで迅速かつ的確に対応できたものと思われる。

7. 地域・社会連携　　評価：B　（自己点検・評価：B）

■評価コメント

- 「アカデミック・リンク・センター」というよりは主に「図書館」における地域・社会連携ということになると思われ、その点では、大学図書館という性質からも、十分

な連携といえる。

- センターの講師派遣も好評を得ているということなので良い取り組みである。
- Covid-19 の影響はあったものの、地域社会への図書館公開、県内他館との連携といった社会貢献・社会連携については、基本的にこれまで同様着実に進めてきており、地域の中核大学図書館としての機能を十分に果たしていると言える。
- 市民への利用公開、アカデミック・リンク・センター／附属図書館主催のイベントについて参加を認めるなど、千葉県内図書館等との連携、高大連携等が行われている。少ない職員数でどこに注力するかという問題があるが、報告書の中での書きぶりが弱いことが、意識や方向性の反映と思われる。
- セクターや館種などを越えた連携・協力が展開されており、国立の総合大学として相応の役割を果たしていると考えられる。
- 市民への公開や高大連携において学外者の利用を可能にしたり、千葉県立図書館との相互利用協力で資料貸借を実施したりと、地域社会に開かれた図書館運営を行っている。また、学外の各団体・委員会に積極的に委員を派遣し、県内の各種協議会や関連組織との連携活動も活発である。ただ、他の大項目と比較したときには、先進的・独創的な試みがなされているとはいいがたい。

■改善に向けての提言

- （日本全国の）一般市民も、とりわけ古医書コレクション等への関心は高いと予想でき、なお一層、デジタル化を進めて欲しいし、また、私が見た限りでは、書名が分からないと検索できないようなので、できればヴァーチャル書架、のようなものを作って、たまたま目にしたタイトルを見て中へ、という誘導もできたら良いのではないかと思う。
- 地域・社会連携に関しても一層のオンライン化を図り、さらに活動の範囲を市民社会へと拡大していくことが望まれる。
- 限られた資源の中で行う活動であるので、ミッションに立ち戻り、地域・社会連携のあり方に、どのような意味があるのかの見直しが必要である。三方（学生、教職員、地域）良しの発想でなければ、持続可能な取り組みとはならず、中途半端なことになってしまう恐れがある。
- アカデミック・リンク・センター／附属図書館の活動から得られた成果を地域に還元し、社会連携において活かすような試みを工夫していただきたい。

■その他中項目に対する評価・提言・コメント等

- 主に地域・社会が持つニーズ（要請）に基づいて活動を展開していると思われるが、持続的な取り組みとするためにも、大学側が持つニーズ（メリット）を提示・充足していくこともも少し強調してよいのではないだろうか。

８．他機関との連携　　評価：A　（自己点検・評価：A）

■評価コメント

- 国内連携、国際連携ともに積極的に取り組んでいて良い。
- コロナで顕在化した資料の使用権利関係への対処も良くなされている。
- アカデミック・リンク・センターが主宰する CLR（大学学習資源コンソーシアム）や３大学連携（千葉大・お茶大・横国大）など、他機関連携に関してはその積極性を高く評価する。
- 国外諸機関との連携も活発である。
- アカデミック・リンク・センター長のリーダーシップにより、大学学習資源コンソーシアム（CLR）の事務局がアカデミック・リンク・センターに置かれ、著作物利用環境整備のための大学間連携の中心として活動していることは高く評価される。その他、３大学の連携や国際連携、国立大学図書館協会の活動、NII との連携等も進めている。
- 国、セクター、機関・館種などを越えた連携・協力が積極的に展開されている。とりわけ、大学学習資源コンソーシアムは、国内の大学における電子的な学習資源の共有・利用を円滑化・活性化する点において、特筆すべき取り組みである。規模や設置母体の違いなど、大学の事情もさまざまであるため、会員加盟というかたちで活動できるところは限られていると思われるが、セミナーの開催や著作物の利用拡大に向けたガイドラインの策定など、設置目的に向けて着実に活動が進められている点は高く評価すべきである。
- 大学学習資源コンソーシアム（CLR）を立ち上げて、その諸活動を通じて我が国における電子的学習資源の製作・共有化を促進した功績は大きい。また、お茶の水女子大学、横浜国立大学との三大学連携は、県境を越えた他に例を見ない取組であり、国立大学を中心にして大学図書館の連携のあり方に大きな影響を与えた。国際連携や各団体への参加においても、積極的に多種多様な活動を展開している。

■改善に向けての提言

- 連携が連携のための連携とならないよう、その実質化には常に努力されたい。
- アフターコロナ期の国外機関との連携・交流の再活性化に期待する。
- 「地域・社会連携」への提言と同じになるが、アカデミック・リンク・センター／附属図書館の活動から得られた成果を活かして、大学図書館にとどまらず、「知」にかかわるさまざまな関連機関をリードする存在であってほしい。

全体に対する意見

- アカデミック・リンクのコンセプトと、センター、図書館の先端的な取り組みが、コロナのような緊急事態における教育・研究の継続を支える基盤として機能したことは素晴らしいことである。

ポスト・コロナの精神風土がどのようになっているのか、予想できないが、学びと研究を通じて人間的なふれあいにも寄与できる場所であり続けて欲しいと思う。明日は今日よりも人間と世界についての知識と理解が一段と深化している、という希望と信念によって大学は支えられているからだ。

- アカデミック・リンク・センターおよび附属図書館の活動内容の詳細な紹介と説明を受け、多くの点で高く評価できると感じた。それらをまとめると、概ね以下の5点にまとめられる。

  第一は、活動内容の先進性あるいはオリジナリティである。千葉大学の置かれた環境や立場、条件等を十分に勘案して可能な限り新たな施設設備あるいはプロジェクトを採用し、実地に移している点で高く評価しうると思う。

  第二は、活動の体系性である。PDCA を常に念頭に置き、そのサイクルの中に実践を位置づけていることを評価したい。

  第三は、プランの実効性の高さである。新奇なプランも実行されなければただの空論であるが、アカデミック・リンク・センターおよび附属図書館の活動にはそのような「かけ声倒れ」のプランは見出し得なかった。

  第四は、影響力である。アカデミック・リンク・センターおよび附属図書館の活動は、一大学内の試みにとどまらず、他の国公私大に対して大きな影響力を及ぼしつつあることがわかった。その意味で、千葉大学はこの分野における日本のリーディングユニバーシティであると言っても過言ではない。

  最後の第五は、組織としての活力と若さである。とりわけアカデミック・リンク・センターの活動を支える人材に関しては、センター長はじめその活力が漲っていることを強く感じた。このことはそのまま組織やその活動の大きな発展可能性につながるものと確信する。

- 一大学のセンターおよび図書館として、学生を中心とする利用者に向けて活動するに留まらず、わが国の大学教育、大学図書館に対する貢献をもたらしている点は高く評価すべきである。大学経営が厳しくなるなかで、予算・人員を確保し、組織・活動を維持・発展させてきた関係者の努力には敬意を表したい。もちろん業務の内容や範囲を拡大していけばよいという意味ではない。自己点検・評価および外部評価などの機会もとらえつつ、調査・分析に基づいた改善を今後も行なっていくことで、限りのある予算・人員を有効に活用していくこと、すなわち「アカデミック・リンク」の理念のもとで、アカデミック・リンク・センター／附属図書館として、ひいては大学（教育）として全体最適化が進められることを期待したい。なお、最適化に向けては、とくに学内の教員が、とりわけ授業を中心とした教育活動の展開にあたって、プラットフォームとしてのアカデミック・リンク・センターおよび附属図書館を有効に活用していく、さらには運営にも参画していくようなかたちが強化されることが鍵になるのではないだろうか。

- 今後に向け、以下の点において改善が望まれる。
  資料の作成においては、コンセプト、強調点、データなどを視覚的に訴える資料を作成すること。他大学の類似機関との比較や、予算規模による違いもあるので、費用対効果などの比較はできないだろうか。学習支援を受けた内容そのものだけでなく、それにより学生らのその後の講義やゼミなどへの参加の態度や理解力に違いが出てきたのかも教員側に調査する、あるいは卒業生を調査することはできないだろうか。大規模なアンケート調査でなくても、少数のインタビュー調査でも良いと思う。
  貴施設ができた経緯も踏まえ、国内における社会的状況、大学に求められるものの変化や、国際的な状況などの観点からの自己点検、評価も必要だろう。新型コロナ感染症の感染拡大から、大学をめぐる状況は目まぐるしく変化してきている。このような状況において、ライブラリーやそこでの学習・研究支援のあり方、学習・研究の資源の位置付けも変化してきている。それらに対するアカデミック・リンク・センター自身の役割に関する議論は行われてきたのか、行われたとすれば、誰がどのように関わり、何を行ってきたのか、新たに付け加えられたミッション、役割はあるのかなど、失敗を含めて、それらの記録を残していくことは、今しかできない、貴重な機会であり、それらのデータは今後、歴史的価値を持つものと考える。
  日本の先端をいく、他大学が注目し多大な影響を与えて続けている、千葉大学アカデミック・リンク・センターの今後の活動に期待している。
- ８つの大項目のうち、６つを「A」評価にした。千葉大学のアカデミック・リンク・センター／附属図書館における活動・取組が、非常に良好であり、高いレベルを維持しながら、さらに発展し続けているからである。今後は、組織をになう教職員が入れ替わっていってもこのレベルを維持していくために、運営組織や設備の継続的な整備・改善はもちろん、理念やミッションの共有をより一層進めていくことが必要になってくる。アカデミック・リンク・センター／附属図書館の教職員の間では、すでにその共有はできていると思われるが、理念やミッション、さらにはこの組織が体現している精神が千葉大学の全体、構成員のすみずみまでいきわたった時に、この組織の本領が発揮され、その存在と理念が大学の伝統の一部となり、その真価が広く全国的、国際的に認められるようになるだろう。これからも、現在の高い水準の活動を支えているスピリットを核としながら、人と組織が成長していくことを期待している。

6.　質疑応答・意見交換要旨

議長　：それでは、竹内センター長の報告と配布資料に基づいて、質疑応答及び意見交換を行います。

委員　：こういう新しい組織を立ち上げて進めていくことに対する評価に際しては、何を目指して、何ができたのか、何ができなかったのか、その障害は何であったのかということを、後に続くほかの大学のライブラリーの参考となるようなものを残して示して公開して共有していただきたい。先ほどの竹内センター長の報告は、とてもよく理解できた。数値の書かれたドキュメント（評価資料）ではなく、例えばビデオか、あるいはプログラムとして共有できるものがあるか、制度として何かできるのか、そういったものを他の大学に対しても積極的に発信いただければいいのではないか。

今日の報告で、卒業生のハードウエアの満足度がほかの学内の施設に比べてすごい。ソフトでの満足度などの数値もきちんと出ているので、それは細かい何かよりもインパクトのある効果だと思う。

一つお願いとしては、ここまでリーディング・オーガニゼーションとして先端を走っている組織であるからこそ、社会がどのように変わってきた上で今のその位置があるのか、あるいは何を少しずつ変えてきているのか、それから、国際的なほかの似たような組織との中での比較、その中でのオリジナリティなどがわかるようになっているといいなと思う。

センター長　：リーディング・オーガニゼーションと呼んでいただき、大変ありがたく思っている。先ほどの報告でも言及したが、我々のセンターの設置以降、日本国内でも急激に大学図書館におけるアクティブ・ラーニング・スペースの設置数はふえてきた。我々の取り組みは、図書館の中にアクティブ・ラーニング・スペースを設置し、それが機能していくことを示す一つのモデルと言えると思う。これはもちろん我々だけではなく、複数の大学がこういった取り組みを積極的に行い、また情報発信をした結果として、スタンダードな形になっていったのだろうと考えている。

二つ目の国際的な比較についてであるが、我々も自分たちの活動を進める上で、海外の優れた事例などについて随分参考にした。そういった点を踏まえ、国際的に見たときには、我々の取り組みが声を大にして言うような傑出した取り組みということはなく、海外である程度進んでいると言われる大学図書館にようやく手が届いているというレベルであるというのが、我々の自己評価である。特にオーストラリアやシンガポールでは、大学図書館はよりダイナミックに動いているという印象がある。それは単にアクティブ・ラーニングのための施設としての大学図書館だけではなく、大学全体というか大学教育全体のダイナミズムが日本と次元が違うというような印象を持っている。

委員　：アクティブ・ラーニングについて先駆的な千葉大学のアカデミック・リンク・センターのいろいろな資料を今回くまなく見て、また訪問することはできなかったが、事前に案内された施設紹介動画を拝見して、随分イメージが湧いた。報告で、アクティブ・ラーニングが広がっていったという数字を見せていただいてよかった。いかに主体的に学べるようにするかというのはこれからの学生のスキルとして一番大事なことで、どのように様々な情報を検索するかという支援に関するサービスも非常に大事だ。また、課外学習時間が増えたといっても、今日の資料からは日本の大学生はまだまだ少ないとは思った。急に変えることも難しいかもしれないが、コロナのせいで大分変わったのではないか。

委員　：例えば40年前の大学の中央図書館は、ラーニング・コモンズというイメージも言葉もなく、司法試験や公務員試験のための勉強をする人たちである時期なんかはあふれていた。千葉大学でも、その時期になるとそういう使い方が優先されてしまうのではないかと危惧している。新入生で入ってきた4月5月ぐらいはみんなでアクティブ・ラーニングを使うが、試験時期が近づくと、図書館というのは試験勉強のために使うところだというような旧来からの使い方、旧来からの意識が優越してしまうのではないかと。そういうようなことはなかったのか。

センター長　：それはもちろんある。実際、1日当たりの入館者数が最も多いのが7月末で、第1・第2タームの試験あるいはレポートの時期、しかも冷房のきいている場所がほしいということで一番多くなると思われる。そのような時期に実際に工学部の学生が、館内における利用者の滞在状況を調査したところ、利用率が 100%を超えている場所があった。パソコンの周辺に人が立って、座っている人と共に画面を見ながら課題をやっているような状況であった。暑さを避けて試験勉強をしたいというニーズのために附属図書館を使うということはあるだろうと思っている。また、亥鼻分館は、医師国家試験の直前になるとその準備のための勉強をする人が多く利用している。

ただ、アクティブ・ラーニングを進めるための場所だからといってそのような利用者を排除するのではなく、学習の場としていかに多様なニーズに柔軟に対応していけるかということが重要なのではないかと考えてきた。例えば自分のわからないところを人と相談したり、あるいはディスカッションをしたり、それを踏まえてまた1人で勉強するとかといったような学生たちの学習スタイルが、実際に我々の観察からは見えてきている。受験勉強や試験勉強が一つのきっかけであるにせよ、その学習の内実というのは少しずつ変わってきているのではないかと考え、またそのような変化を期待しているところでもある。

委員　：大学で学んできた人を受け取る社会のほうが、そういう体制になっているかというのも非常に大きな課題だ。例えば教員試験の前には、教育学部の方たちはそういうところで教員試験のための勉強をすると思う。そのときの課題は、教育そのものという大きな

ものから出てくるようなアクティブな課題というよりも、過去問とかだと思う。そこまでプロブレムという範囲に入れるとすると、PBL（Problem Based Learning）をしていると言える。欧米などでは入社試験あるいは公務員試験で知識系の試験をするところは多分少ない。日本の社会が知識系の質問をするような入社試験とか入所試験とか公務員試験とかをやっている限りは、そういうふうに学生が対応するのはしようがない。千葉大学のようなこういう試みをベースに、やがて雇用の方も変わっていくようなことを期待している。

委員　：私は図書館情報学という分野を専門にしているので、今回、評価に当たっては一般的な日本の国内の大学の状況から見てどうかということで評価をしたが、そうするとほぼAになるのは間違いない。この千葉大学の附属図書館とアカデミック・リンク・センターの複合体が、新しい大学図書館のモデルを日本に提示したというのは間違いがない事実だと言い切ってよいと思う。当初から非常に着目されていて、それがその周りの大学図書館に与えた影響は極めて大きいという点で、まさに先駆的な例であるという点で本当に高く評価できるだろう。驚くべきは、それがいまだに続いていて、さらに進化をさせながら時代に合ったものを、常に先端を走り続けているという点について、本当に敬意を表する。

竹内センター長の報告の中から２点ほど、質問する。

１点目は、常に新しく進化させながら進めていく中で、予算とかポストとかを確保して、さらにそこに優秀な人材を配置することがどうしても重要になってくる。どのように予算やポストや人材を確保して、かつそれを継続していくかという、根本的な考え方のようなものがあればお伺いしたい。

もう１点が、学習時間の話で、学習時間が伸びたというのは非常に大きな成果だと思う。ハードをつくって、あるいはサービスを提供しても、それが結果・成果にどう結びついたかということはなかなか検証されづらいので、この学習時間が向上というのは非常に重要なデータだ。そこからさらに進んで、なぜ伸びたのか、どういう学習の内容で伸びているのかということがもしわかれば、あるいはこれから調査する予定があれば伺いたい。

あわせて、平たく言えば成績が上がったとか資格が取れたとか就職が決まったとか研究でいい論文が書けたとか、学生がアカデミック・リンクそれから附属図書館を使うことによって上げた学習の成果の部分の評価を、これからどのように行っていくのかということを伺いたい。

附属図書館あるいはアカデミック・リンク・センターが提供していることと同時に、各学部・学科がどのようなカリキュラムを提供しているか。それから、そこにどういう指導の方針、教育の方針を持っているかということも、大学図書館あるいはそこにあるコンテンツやサービスの利用にかなり影響を与える。今回のアカデミック・リンク・センター及び附属図書館の成果を考えるに当たって、どうしても学習の内容、学習の成果に踏み込まなきゃいけないのではないかということで、成果の部分の評価について伺いたいと思った。

センター長　：活動のための予算、人も含めてリソースをどのように確保するのかという点については、アカデミック・リンク・センターの設置当初から苦労してきた。センターを2011年度にスタートさせて、最初の5年間は、毎年のように文科省に書類を持っていって説明をし、お願いをして予算を確保するということをしてきた。第3期の中期目標・計画期間に入ってからは、大学の機能強化ということで、教育に関する領域の中で組織整備予算が措置されたため、人件費についてはその枠で5年間は保証されるといったようなことがあった。いろいろな状況が少しずつ良くなるという、我々にとっては大変ありがたい状況ではあった。しかしながら、センター設置当時からの教員の肩書きには未だに「特任」がついている。ただ幸いなことに、"ENGINE"という全学的な教育改革プログラムの中で、スマートラーニングに係る部分が非常に大きな構成要素となったため、予算面での整備も徐々にされている。第4期中期目標・計画期間、すなわち来年度以降は、今よりも状況は少しよくなっていくだろうと考えている。

二つ目の成果の部分も、非常に難しいところである。先ほど卒業時の満足度とか、卒業時に自分がどのような能力を身につけたかということについての自己評価の結果をお示ししたが、それとて、何が要因となってそうなったかについては全くわかっていない。我々としては、アカデミック・リンクがあったから本当にいい学びができたということを、エピソード的には掘り出すことができるかもしれないけれど、定量的にそのことを示すのはかなり難しいのではないかと思っている。

それから、学部間のカリキュラムの変化と、附属図書館あるいはアカデミック・リンクの利用についてであるが、入館者統計に基づいて、入館者の学部別の内訳は、学部の定員に概ね比例していて、特定の学部の学生が突出して多く使っているわけではないこと確認している。文系の学生は図書館に来るけれども理系の学生は来ないのではないかとよく言われるが、西千葉の附属図書館に関してはそのような状況にはない。

センター教員　：報告スライドの42枚目に示した授業外学習時間について少し補足をさせていただく。この数値は、授業時間は当然含まれておらず、授業に関係のない学習時間も含まれていない数値となっている。大学全体として単位制度の実質化ということが近年問題視されているが、その中で一番問題になっているのが、大学の授業そのものが授業外学習時間を圧迫してしまうという状況で、本学もそういうような状況が確認されているというのが実態かと思われる。特にコロナ禍の昨年度に関しては、1年生を中心にガイダンスがあまり有効に機能せず、単位登録がかなり多くなってしまった。それに伴って学習時間もふえているような状況は確認されるが、こういったものについては単位数と連動するので、キャップ（CAP）制等も学部で運用されていく中で、ガイダンスも今年度に関しては適正化されており、それに伴ってまた数値も変わっていくのではないかと考えている。

図書館の利用とアカデミック・リンク・センターの学習支援の活動に関連して、この学習時間をどう考えるかということは、2015年度に図書館の利用と授業外学習の関連性につ

いて分析したことがある。図書館の利用頻度が高ければ高いほど、授業外学習時間は高くなるという相関関係を、当たり前のことでもあるが確認している。ただコロナ禍で、どういった場所で学習をするのかも近年変わってきて、今後また学習の場所についても考えていかなければいけない。その内実についてはまた、状況に応じて分析をする必要があるかなと考えている。

委員　：竹内センター長も言われていたことだが、アカデミック・リンク・センターの活動や図書館のあり方以外の検討外変数があまりにも多過ぎ、実際に学生たちが使っている大学の施設や学習機会は学部や研究科にたくさんあるので、そういうところでの対応も実は変数の中に入れないと本当のところはわからない。状況証拠程度とは思うが、何らかの真実の一端はこの中に出ているとも思われる。

委員　：アメリカの事例で、例えば学習支援を受けたいために来たなどの目的を選択してから入館させて、滞在時間などのいろいろなデータが集める。さらに、大学の成績でかなりリスキーな学生について３段階程度のデータがあって、例えばその人たちが学習支援を受けていかに留年しないで上がれたか、そこから学習支援を何時間受けた学生との比較、同じリスクレベルの学生でも学習支援を利用しなかった人たちがどうだったかとかいうような比較をしていたので、そういう利用データは何かとっているかを伺いたい。

センター長　：滞在時間を調査したいという希望は以前からあるが、現時点では実現できていない。本学では学生証のICカード化がなされておらず、入館のときに磁気カードを読み取らせている。IC カードで入館コントロールができるようになると、入館時と退館時にカードをリーダーに読ませてもらうことで簡単にしかも正確に滞在時間を計測することができる。これまでは、アンケート調査を通じて滞在時間を明らかにしていたので、正確な滞在時間を把握できるように早くしたいという強い希望は持っている。その時に、来館の目的や実際の利用状況については、当然さまざまな形で調査をしていかないといけない。学生のパフォーマンス、成績などとの関係も明らかにしていくのは重要なことだと思っている。以前行った調査・分析では、学生は成績の良し悪しにかかわらず図書館に来ていて、図書館への来館頻度が高いからといって成績が向上したということはなく、来館頻度と成績の上昇には相関関係はなかったと記憶している。ただ、それについてはどういう成績評価をしているかに大きな影響を受けている可能性があり、詰め込み型でとにかく何か覚えていけばいいという評価がなされているとすると、新しい学習空間で学生同士がディスカッションをすることによって何かいい成果を得ていたとしても、その点を正確には評価できないのではないかという議論をした。

　そのようなわけで、学生の成果との関わりを示すデータの収集はきちんとやっていきたいことの一つではあるが、成績評価の実態を正確に把握した上でないと適切な分析にはな

らないのではないかと考えている。

委員　：今後、学生証がIC化されたときのために、今からどういうデータをとりたいかは検討しておくと良い。また、アメリカの関係機関を調査した経験から、予算をとるために積極的にそういうデータを出していくことも、一つの戦略としてはあるのではないかと思う。

委員　：コロナ禍によりオンライン授業が増えたが、オンライン授業だとログインデータが全部出る。ログインしたままでそっぽを向いていたらわからないが、一応ログインして画面に出ていれば、見ているだろうと。だから、インプットのデータがとれるようになった。私のところでは、このログインデータの、言ってみればビッグデータを分析することで、かなりきちんとしたインプットの部分がつくれるようになって、成績と関連させて、たくさん見ている人のほうが成績がいいというような結果が出るようになった。それはやはり、従来型の生身の大学教育でやることになったら、何らかの方法があると思うが、難しいだろうなということは重々感じている。
　それからもう一つは、きちっとしたデータをとっても、結局、教育というのはもうちょっと漠としたものなので、ボックスの中にこっちから入れてそれと関数をかみ合わせればある変数が出てくるものでもないなという気もしていて、その辺のところは難しいなと思う。

委員　：コンセプトとしてのアカデミック・リンクと施設というか組織としてのアカデミック・リンク・センターがあって、事務組織としてまたアカデミック・リンクグループというのがあるということで、関係が分かりにくかった。
　アカデミック・リンク・センターと附属図書館の活動の外部評価ということだが、附属図書館というのは大学附属か、あるいはセンター附属図書館か。

センター長　：附属図書館というのは大学に附属の図書館であり、組織としては附属図書館は大学内の一つの部局ということになる。アカデミック・リンク・センターも一つの部局で附属図書館と並列である。

委員　：アカデミック・リンク・センターと附属図書館は、部局としては別だけれども建物としては一体化していて、同じ活動の中に含まれていくというような理解でよろしいか。

センター長　：そのように理解していただきたい。アカデミック・リンク・センターの一部の業務は教育企画課が担っているが、事務組織としては附属図書館とアカデミック・リンク・センターはほぼ一体と言える。

委員　：組織図とかも拝見すると、アカデミック・リンク・センター付の特任の先生方がいる。センター長とか副センター長の先生方はまた別のご専門がおありになると思うが、このセンターの先生方というのはどういう活動をなさっているのか教えいただきたい。

センター長　：組織としては、評価資料の図.1-4 のとおり、センター長と副センター長（専任教員）のもとに部門がある。それぞれの部門に特任教員も属しており、そこでプロジェクト型の活動とオペレーション型の活動を並行して動かしていくという位置づけになっている。とはいえ、もともとセンターの組織はそれほど大きいわけではなく、これらの教員組織、事務の担当を含めて、大きな課題については一体となってこれらに取り組んでいる。

それぞれの教員の専門についてであるが、２名の副センター長はもともと情報工学、物理学のバックグラウンドを持ち、工学部の所属であったが、５年間の時限でアカデミック・リンク・センターに出向という形をとっている。そのため両副センター長は、工学部・研究科での授業を持ちつつ、アカデミック・リンク・センターの活動に従事している。もう一人の副センター長は、高等教育論、IR がご専門で、もともとは本学にあった高等教育研究機構の所属で、IR に関する業務を主担当としていたが、５年前に体制の整備をしていく中で、基盤としての FD、IR それから SD の連携ということもあって、こちらで仕事する形になった。現在、人文公共学府の授業を担当しながら、アカデミック・リンク・センターに所属している。特任の教員もそれぞれ部門に所属していて、その部門に割り当てられているプロジェクトそしてオペレーションの活動を実施している。

附属図書館は元来教育研究組織ではなく、教員がいない組織であった。そのため、教育研究組織として成り立たせるために新たにアカデミック・リンク・センターをつくり、附属図書館だけではなく、当時の総合メディア基盤センターと普遍教育センターから兼務教員に来てもらっていた。これらの教員は兼務教員という名称ではあったが、実質的にはセンターの専任のような形で、センターの仕事をメインにやっていた。それが報告の中では「初期の」と説明をしていた部分で、その後、独自の教員枠を時限で確保して、今の体制を構築してきた。

委員　：今の説明でよく理解できた。もう一つは、評価のことに関して集めたデータをどう扱うかということで、例えば評価資料の 71 ページにあるルーブリックについてである。ルーブリックというのはすごく細かく、特に海外で作っている基準を日本語にすると、項目間の違いがよくわからない場合がある。こういうのは、授業とか企画・プロジェクトを評価する大学側には楽というか基準がはっきりしていると言えるが、教員や学生がそれを自分で使って評価する場合に非常にやりにくく、型にはめられているような印象があるのではないかという気がする。そういう一定の基準が全学的に取り決められた場合に、どういう反応が予想されたり、どんな反応が実際に出ているかを伺いたい。

センター長　：言及されたのは ALPS の履修プログラムの前提となっている教育・学修支援専門職養成に係るルーブリックかと思う。これについては、我々が教育・学修支援専門職を養成しようと考えた際に、その拠り所となるものとして我々自身がその目的に特化して作成し、使っているもので、広く一般的な意味での教育に当てはめるというものではない。教育・学修支援専門職養成のための履修証明プログラム、教育プログラムを構築する際の根拠であり、世の中に全くない教育・学修支援専門職というものの理解をしていただくためのものとご理解いただきたい。

学内で学部単位のルーブリックをつくっているのは医学部と国際教養学部のみで、ルーブリックをつくって達成度の評価をしている学部はごく限られている。カリキュラムマップ、カリキュラムツリーは、全学部・研究科で作成しているが、ルーブリックに対する考え方がそれぞれの教員によって異なり、部局によっても多分違っていることから、それを大学で各部局に対して一斉につくるというようなことは現時点では千葉大学ではしていない。

委員　：教育にかかわる者として、ルーブリックというのは自分ではあまりお勧めできないというか、好きではない。つまり、作る手間と答える手間と、そこから得られるものがそれより効果があるのか有効かどうかということを考えると、作成に関わった人たちにとっては作るプロセス自身に意味はあると思うが、資格認定のようなものは別にして、なかなか活用されないのではないか。

委員　：一般に国立大学では、IR 組織は執行部に直結していて、例えば学長直結とか、そういうところで動いていたりする。大もとのところで資料を集めて、各部局が必要に応じてそのデータを使っていくという形が普通だと思うが、千葉大学ではアカデミック・リンクの中に IR という業務があって全学はこれを使うという体制なのか。

センター長　：本学における IR の実施体制であるが、研究 IR、教育 IR、管理運営 IR というふうに領域ごとに実施されており、それらを統合する組織が企画担当理事の下に置かれている。その枠組みの中で教育に関する IR は、アカデミック・リンク・センターが担うという形になっている。全学的な意思決定のための情報を提供するし、求めに応じて部局単位での情報を提供することもある。

委員　：今、例えば Society 5.0 といったオープンサイエンスの推進という大きな流れの中で、データの利活用とか、どのようにオープンサイエンスを推進していくのかということについて、大学のような研究機関がどういうふうにやっていくかの検討がそれぞれ求められている。貴学の場合には ALC というよりは附属図書館だと思うが、そのあたりには何か関与されているのか。リポジトリを接点として分担について話が進む場合もあるが、いか

がか。

センター長　：既に関係部署でこの問題について話し合いをしている。方向性については合意がされており、それぞれの関係部署が学内でどのようなことに取り組んでいけばいいかということについては表までまとめて、あまり大きな異論はない状況にまできていると判断している。これを誰が先頭に立って推進していくのかというところが課題である。

委員　：ようやくデジタル庁ができてみたいな日本の現状を考えると、本当にそれはアカデミアが推進してやっていかないといけないところだと思う。

議長　：この辺で先ほどの竹内センター長の報告に対する質疑・ご意見を一旦終了とする。

第 2 部

千葉大学アカデミック・リンク・センター／附属図書館

自己点検・評価委員会報告

1.　開催日時・次第

日時　　2021 年 7 月 28 日（水）　9：00〜11：20
場所　　千葉大学附属図書館本館　対面（I 棟ひかり）＋オンライン（Teams）

議事次第

0．アカデミック・リンク・センター／附属図書館見学（対面出席委員のみ）
　休憩
1．開会（14：00〜）
2．アカデミック・リンク・センター／附属図書館報告
3．質疑応答・意見交換
4．委員による評価についての意見交換
5．講評
6．閉会（17：10）

配布資料

資料 1 自己点検・評価／外部評価 資料
資料 2 自己点検・評価／外部評価資料 別添
資料 3 自己点検・評価委員会名簿
資料 4 自己点検・評価委員 評価まとめ
資料 5 自己点検・評価／外部評価資料の修正

2.　委員名簿、出席者

アカデミック・リンク・センター／附属図書館 自己点検・評価委員

竹内　比呂也　アカデミック・リンク・センター長、附属図書館長
安西　尚彦　　附属図書館亥鼻分館長
小林　達明　　附属図書館松戸分館長
伊藤　彰一　　医学研究院教授
白川　優治　　国際学術研究院准教授
橘　永久　　社会科学研究院教授
檜垣　泰彦　　アカデミック・リンク・センター副センター長（准教授）
山本　和貫　　アカデミック・リンク・センター副センター長（准教授）
岡田　聡志　　アカデミック・リンク・センター副センター長（准教授）
鈴木　修二　　アカデミック・リンク・センター副センター長、附属図書館事務部長
鈴木　宏子　　附属図書館利用支援企画課長

綾部　輝幸　　附属図書館学術コンテンツ課長

陪席者

國本　千裕　　アカデミック・リンク・センター特任教員（特任准教授）
姉川　雄大　　アカデミック・リンク・センター特任教員（特任講師）
藤本　茂雄　　アカデミック・リンク・センター特任教員（特任講師）
我妻　鉄也　　アカデミック・リンク・センター特任教員（特任助教）
武内　八重子　附属図書館利用支援企画課副課長
大園　岳雄　　附属図書館学術コンテンツ課副課長
北村　雅子　　附属図書館利用支援企画課総務係長
磯本　善男　　附属図書館利用支援企画課利用支援企画グループリーダー
池尻　亮子　　附属図書館利用支援企画課アカデミック・リンクグループリーダー
米田　奈穂　　附属図書館学術コンテンツ課学術コンテンツグループリーダー
佐々木　智穂　附属図書館学術コンテンツ課学術コンテンツグループ専門職員
丸茂　里江　　附属図書館学術コンテンツ課亥鼻分館係長
村上　雅史　　附属図書館学術コンテンツ課松戸分館係長

3.　議事要旨

議事に先立ち、委員長挨拶、副委員長の決定、本委員会の位置づけが説明された後、各委員の紹介、配布資料の確認を行った。副委員長はアカデミック・リンク・センター自己点検・評価委員会規程で「委員の互選」とされており、檜垣委員が推薦されて、了承された。

（1）アカデミック・リンク・センター／附属図書館の自己点検・評価について
竹内委員長から、今後の委員会評価について下記のとおり概要説明があり、了承された。

・　資料 4 の評価および本委員会での意見等をとりまとめて委員会としての評価結果と総表を作成し、後日各委員に送付するとともに、外部評価委員会の資料とする。
・　総評については原則として委員長に一任いただきたい。
・　報告書はセンター／附属図書館の Web サイトへ掲載・公開予定である。
・　報告書冊子版作成および学内意思決定機関への報告等は、外部評価（9/24 に委員会開催予定）と合わせて行う。

その後、資料 1 および 4 に基づき、項目ごとに意見交換を行い、併せて委員会としての評価資料を策定した。

1. 管理・運営：A 評価 6 名、B 評価 6 名
   - 表 1-5 について、センターには教員定数がなく、「専任教員」は裁量をもつ定員ではないことが補足された。
   - 1.5.2-1）図書館資料費については亥鼻地区での助成だけが記載されているが、西千葉や松戸でも学部経費での資料購入等があることから、ここは同窓会等の助成として特記する方が良い。
   - 評価資料全体を通じて活動報告が中心で、活動の評価が記載されていない。
   - 広報に関して、SNS の利用状況は、Twitter のフォロワー数が 2020 年度末で 2554、ツイート総数は 4048 件。Facebook は 7/26 現在でフォロワー数が 677。アカウント等とあわせて外部評価資料には追記する。
   - 活動に対する教職員の負担感や課題意識の確認については、今後の課題としたい。
   - 委員会評価は B+とする。
2. トピックス：A 評価 6 名、B 評価 6 名
   - 章立てとして「トピックス」を評価対象とするのかという意見があり、外部評価資料では名称を変更する。
   - 松戸分館は改修により、アカデミック・リンクの理念を反映した空間が整備されたことで、松戸キャンパスでもその理念が理解されやすくなった。園芸学の専門図書館としての特徴的なコレクションを大事にしつつ、図書館と教育との連携をさらに進めたい。
   - オープンアクセスについては方針の策定などの対応を進めているものの、その実質化については改善の余地がある。
   - 委員会評価は B+とする。
3. 人的支援：A 評価 6 名、B 評価 6 名
   - 様々な活動が実施されてきたが、その認知度を高める必要がある。また物理的環境に結び付いたことが多く、ポストコロナの展開は検討を要する。
   - あかりんアワーは、コンテンツとしての活用の余地があるのではないか。学生だけでなく、学外に向けて総合大学としてのブランディングに資するコンテンツになる可能性がある。
   - 委員会評価は B+とする。
4. 空間整備：A 評価 8 名、B 評価 4 名
   - 様々な環境評価にかかる調査活動は、この評価期間の前半に実施したものが多く、後半は松戸を除いては調査ができていない。
   - ポストコロナにふさわしい空間・設備の検討は大きな課題である。
   - 委員会評価は A とする。

5. コンテンツ：A 評価 6 名、B 評価 5 名、D 評価 1 名
   - 5.1.3-2）電子ジャーナルについては厳しい状況の説明のみに留まっているため、今後のビジョンなどを追加してはどうか。
   - 資料の廃棄については、教員への廃棄可否の照会において説明が十分でないことが、判断を行う教員に大きな負担をかけていることから、手順の改善を要する。
   - 委員会評価は B-とする。
6. 教育基盤の支援：A 評価 5 名、B 評価 7 名
   - 学内への IR 分析結果の提供について、活用状況などのフィードバックがあれば追加してはどうか。
   - 委員会評価は B とする。
7. 地域・社会連携：A 評価 4 名、B 評価 7 名、C 評価 1 名
   - 地域との関わり方が今後変化する可能性に関連して、地域のニーズなどは基礎データとして持っておいた方が良い。（エリア、内容など）
   - 高大接続改革が検討されていることから、高大連携の在り方の変化への対応が、今後は求められる可能性がある。
   - センター／図書館が主体的に地域・社会連携の活動を行っているわけではないという点が課題といえる。
   - 委員会評価は B とする。
8. 他機関連携：A 評価 8 名、B 評価 4 名
   - シンガポール国立大学図書館と交流協定が締結したことは特筆に値する。
   - 委員会評価は A とする。

（2）その他

今後、委員会評価指標と総評をとりまとめて送付すること、外部評価に際しては本委員会で不足等が指摘された情報を可能な限り追加・修正して資料を作成することが確認された。

外部評価委員会は 9 月 24 日に実施すること、予定が合えば自己点検・評価委員にも参加いただきたいことが伝えられた。

4.　評価結果

評価指標　A：非常に良好である　……　十分な活動がなされている
B：おおむね良好である……　改善の余地がある
C：やや不十分である　……　改善の必要がある
D：不十分である　……　大幅な改善が必要である

1．管理・運営　評価：A　（自己点検・評価：B＋）

【総評：B+】
アカデミック・リンク・センターの学部レベルでの「考える学生の育成」、大学院レベルでの「知のプロフェッショナルの育成」を目標として 5 部門体制を整備し、中期目標・中期計画に基づき、数々の多様な活動を行っていることは高く評価できる。また教職員の研究・活動成果の着実な発信が数多くなされていることも特筆に値する。一方、大学全体の中での学生支援部門との有機的な連携、IR 部門の位置づけについては、さらなる改善や検討の余地が見られる。また、全国平均を下回る図書館運営費、図書館資料費については改善が必要である。さらに現在の仕事量と人員のバランスについては検討の余地がある。

■各委員評価

評価指標	A	B	C	D
評価数	6	6		

■評価コメント

- 教職員、とりわけ職員によるさまざまな成果の発信の多さは特筆すべきことである。
- 体系的かつ効率的に取り組まれている。
- 「考える学生の創造」に向けて、附属図書館とアカデミック・リンク・センターの 2 つの組織がうまく融合している。
- オープンアクセス化、アクティブ・ラーニングの環境整備を積極的に推進している。
- 2011 年に発足したアカデミック・リンク・センターの基盤強化として、大学院レベルの教育・学修支援の体制を整備し、「知のプロフェッショナル」育成を目標として掲げている。そのために整備された 5 部門の体制は適切である。
- 「千葉大学オープンアクセス方針」を策定し学術研究成果の OA 化を推進していることは、昨今の学術出版をめぐる世界的な情勢と照らしても、意義が深いと思う。
- コロナ禍対応については、「千葉大学におけるメディア授業の実施についての臨時サイト」や「オンライン学習支援ポータルサイト（EYeL!)」の開設など、教職員や学生への適切な支援は評価できる。ただ、全体としてメディア授業に関する様々なトラブ

ルや問題点があることは事実である。限られた資源の中で精一杯の活動がなされていると評価している。

- コロナ禍におけるメディア授業の円滑な実施への貢献は評価に値する。
- 学部レベルでの「考える学生」育成のための学部学生支援、並びにそれを強化・継続した形での大学院レベルの教育・学修支援のための体制は、中期目標・中期計画に基づき、実績を踏まえて着実に進化しており、評価できる。
- アカデミック・リンク・センターが学内の教育系センターを取りまとめる国際未来教育基幹内に位置づけられ、大学の教育改革に貢献する体制が取られていることは大いに評価できる。組織・運営体制も確立され安定的な運営が可能となっている。また附属図書館を基盤として、図書館職員とアカデミック・リンク・センター教員の教職協働体制が確立していることも望ましいあり方だと考える。
  見学者が多いこともいまだに全国的に注目されている証であるが、それを裏付けるように教職員の研究・活動成果の発表が数多くあり、活発な活動と発信を行っていることも評価に値する。
- 「考える学生の創造」からさらに「知のプロフェッショナルの育成」を目標に加え、２．以降の各項目に見られる活発な活動を評価期間中に行っている。職員数は多彩な活動に比すれば少なく、予算確保にも苦心が伝わるが、図書館運営費・資料費が安定化を見たことは大学の教育・研究基盤を支える組織としての評価を得たとも考えられる。
- 1.1.1　多くの学生、教職員を利用対象者としているが、利用対象者を示す表に卒業生が含まれていない。
- 1.2.2　IR 部門と FD・SD 部門が同一部門に位置付けられているが、IR 部門を独立した部門として、全体を俯瞰できるように位置づけることを検討してもよいと思われる。
- 1.4.3　FD 推進専門委員会、ICT 推進専門委員会、教育 IR 専門委員会の委員長をアカデミック・リンク・センター長が務めている。センター長のリーダーシップを発揮しやすく事業推進の観点から効果的だと思われるが、親会議である教員会議の議長を務めるセンター長とは別の教員が、各専門員会の委員長を務めることを検討しても良いと思われる。
- 予算に関して、アカデミック・リンク・センター／附属図書館の活動が先進的な成果を上げているにもかかわらず、大学総経費に占める図書館運営費、図書館資料費の割合が全国平均を下回っているのは如何なものか。
- 学修支援の体制は整いつつあるが、学生の学習活動の基盤となる学生支援などは他部局の管轄になっており、それらとの有機的な繋がりがこの資料からはあまり見えてこない。
- おおむね良好と考えられるが、以下の点に課題があると考えられる。
  （1）専門委員会と教員会議との位置づけと関連性

（2）会議の多さ（参加構成員の重複と頻度）
（3）図書館システムのその他学内システムとの連携
（4）広報によるサービスの認知度
（5）教員の研修制度

- 評価資料のこの部分は、組織・活動内容の紹介が主な内容である。アカデミック・リンク・センター／附属図書館が様々な活動をされていることは分かるが、それが十分な活動か否かを判断する材料は、報告資料のこの部分では分からない点が多い。また、組織紹介に分かりにくい点がある。1.2.2 によると「アカデミック・リンク…は新しいコンセプトであり。その実現のために…アカデミック・リンク・センターが発足した」とあるが、具体的に何を行っている組織なのか、より具体的には、資料があり、自習机があり、司書の方々がいる古いタイプの図書館となにが違うのか、「1　管理・運営」を読んでもよく分からなかった。
- 今後も新たな変化等に適切に対応していくことを期待する。

■改善に向けての提言

- 1.1.1　卒業生も利用対象者に含めることにより、千葉大学の同窓組織のつながりが強まるとともに、卒業生のアカデミックな活動を支援することにつながっていくと考えられる。
- 千葉大学全体の問題かもしれないが、分かりにくいカタカナ組織名が多すぎるように思われた。以前の基本概念とのことだが、1.2.2 の「アクティブ・ラーニング・スペース」から、その具体的内容（活動）を正確に想起できる日本人、千葉大生は多いのだろうか？日本語解説の「学習空間」を見ても、意味がよく分からない。自習支援（自習場所・共同利用室・学習相談デスク）とし、英語は Research commons と標記してはどうだろうか？現状は、日本人にも留学生にも分からないカタカナ名が多いように思われる。
- 2020 年度から、学内予算の再編成により安定した財源を確保できるようになったことは喜ばしい。しかし、図書館運営費の大学総経費に占める割合が、国立大学の平均を下回っていることは残念である。
- 「アクティブ・ラーニングの推進」について、コロナ禍のメディア授業の中でどのくらい実施できていたのか。メディア授業実施で身についた動画の利用習慣を、コロナ後のアクティブ・ラーニングの実施に発展できるよう導く。
- 学生支援室等との有機的な協働が望まれる。
- （1）全学の方針を決定するプロセスが曖昧であり、教員会議ではそれは決定できないものなので、より全学の意見を収集しやすい意思決定プロセスを採用すべきである。
  （2）会議の数や時間の縮小に努め、実質的な意思決定の在り方を模索すべきである。
  （3）ユーザー視点から、より統合的なシステムとしての在り方を模索すべきである。

（4）EYeL!の認知度すら 2020 年度前期には 1 割程度であったことを踏まえ、アウトリーチを検討すべきである。

（5）組織的・体系的な研修制度を教員についても検討すべきである。

- 予算面では、アカデミック・リンク・センターは設立以来、文部科学省からの交付金と大学経費で運営されており、交付金の獲得が予算確保のための必須事項となってきた。千葉大学に欠かせない学習支援の中核として、全面的に大学経費での運営となることが望ましい。また、図書館運営費、資料費については、国立大学の全国平均および 8 学部以上の全国平均を下回るので、改善の努力が必要と思われる。

■その他中項目に対する評価・提言・コメント等

- 1.6 図書館業務システム、1.11 防災対策に関連して、サーバ室の長時間停電対策として自家発電装置と接続可能な電源配線の装備が好ましい。
- web や SNS による広報活動は積極的に行われている。附属図書館の web 閲覧数が若干右肩下がりになっている点が気になるが、逆にアカデミック・リンク・センターの閲覧数は増えており、棲み分けが進んでいるのかもしれない。分析が望まれる。
- 研究及び活動の成果が広く発信されており、5 点もの受賞があることがその質の高さを物語っている。また、教員と職員が共同で取り組んだものが多い点も高く評価できる。
- 以下の状況について、追加の説明を求めたい。
  ・図書館、アカデミック・リンク・センターの運営について、教職員 1 人 1 人がどのように考えているか、その意見や負担感、課題意識等を示す資料

２．評価期間中の特記事項

【総評：B+】
アカデミック・リンク松戸については、本学が抱えていた全学的な課題であるキャンパス間格差の是正につながり、アカデミック・リンク機能の全学展開として高く評価できる。またその準備段階で実施したニーズ調査に基づいたサービスの展開、卒業生や地域と密着したブランディングの構築も評価に値する。この環境で、園芸学部・研究科の教育と連携して学部生・院生の支援を進めることが、これからの課題と考える。新型コロナウイルスへの迅速で適切な対応は評価できるものの、今後の学習環境やサービスについては、検討や見直しが必要である。オープンアクセスへの対応については、先進的・前向きな対応は評価できるが、オープンアクセス方針の実効性や学内への周知が十分でない可能性がある。

■各委員評価

評価指標	A	B	C	D
評価数	6	6		

■評価コメント

- 学生から「松戸格差」と言われていた松戸キャンパスの学習環境改善がなされたことは、特筆すべき成果として評価すべきものである。
- 偏りのない広範囲にわたるものを対象と出来ている。
- うちわ褒めになってしまうが、一部局キャンパスへのアカデミック・リンク松戸の設置は画期的。
- 数々の準備や検討を経て、アカデミック・リンク松戸が開設にいたったことは誠に喜ばしいことである。
- アカデミック・リンク松戸、新型コロナウイルス感染症対応、オープンアクセスへの取り組みについて、積極的に活動している。特に新型コロナウイルス感染症対応については、経験のない危機に対して迅速かつ柔軟に対応している。
- 2.2.2 に見られる、郵送での資料貸し出しなど、コロナ禍の中で大学の中枢たる図書館機能の維持にご尽力いただき、深く感謝している。
- アカデミック・リンク松戸の始動は大変喜ばしい。西千葉のアカデミック・リンク・センターの経験をもとにしつつも、単独学部キャンパスであるという特色を踏まえ、さらに園芸学部教員や大学院生へのインタビューなどによってニーズを把握して、適切に計画が作成された。建設費用の一部が使途指定で寄せられた寄付金やクラウドファンディングで賄われた点に、園芸学部の松戸地区との密着性を感じた。
- 新型コロナウイルス感染症対策については、全学への通知や館内利用の制限など、適切な措置が講じられたと評価する。メディア授業の支援に関しても、オンライン学習ポータルサイトの構築や学習支援デスク等のオンライン化など、適切な対応がとられた。
- アカデミック・リンク松戸に関して、しっかりとした調査結果に基づき設計が行われた点が評価できる。
- 新型コロナウイルス感染症対応に関して、迅速に適切な対応が行われた点が評価できる。
- 「アカデミック・リンク松戸」の立ち上げは一大事業であり、通常でも困難を極めるところを、コロナ禍にもかかわらず大過なく成し遂げられたことは高く評価される。特に、事前の綿密な調査に基づいて、松戸キャンパス特有の課題に特化した空間整備、並びに学習・研究支援体制が組まれており、今後のよきモデルケースになり得る。
- 感染症対策は、突然の事態にも関わらず、できる限りの対応がなされていると思われる。
- サービスやコンテンツのオンライン化、オープンアクセスの取り組みなどは、現時点で可能な対応はなされてるが、発展途上の課題でもあり、今後の進展が望まれる。
- 特に、迅速な新型コロナウイルス感染症への対応は評価できる。
- 学生からのキャンパス間格差解消の声があった松戸分館について、計画段階から基礎

データおよびインタビューやアンケートによりニーズをくみ取り、園芸学部にふさわしい「フィールドとコンテンツと学習の近接」というコンセプトを打ち出して空間やサービスを設計したことは、アカデミック・リンクの全学展開の第一歩であったと思う。

- 松戸分館の改築とアカデミック・リンク機能の展開、新型コロナウイルス感染症対応における電子書籍の重点整備・オンライン学習支援ポータルサイトの構築等のオンラインによる学習支援、オープンアクセス方針の策定と CHORUS 機関ダッシュボード・サービスによるリポジトリ登録コンテンツの充実、いずれも意義深いトピックである。
- オープンアクセスへの取組に関して、「千葉大学オープンアクセス方針」はその実効性に疑問が残る。
- おおむね良好であり、特にアカデミック・リンク松戸の始動は、マルチキャンパスの中で本学が長い間抱えてきた全学的な課題であるいわゆる「松戸格差」を是正するためにも大きく期待されるものであるとともに、様々な意見を収集し、ボトムアップ的に活動が実施されていることも評価される点である。コロナ禍の対応においてもEYeL!の構築などにおいて、迅速な対応が取られたことは評価される。一方で、コロナ禍においては、本学の図書館及びアカデミック・リンク・センターが学習環境を特徴としていたこともあり、その機能が十分に果たせず、他大学の図書館等よりも大きく活動が制限された側面がある。今後、ニューノーマルとしての学習環境をどう構築していくかは、図書館及びアカデミック・リンク・センターの役割を検討する上で、重要な点と考えられる。

■改善に向けての提言

- コロナ禍のため、始動後の全面的運用がまだ始められていないアカデミック・リンク松戸だが、アカデミック・リンク・センター本部、園芸学部教務委員会、園芸学研究科学務委員会と連携して、十全な利用を達成していく必要がある。園芸に関わるわが国唯一の専門図書館でもあり、農学教育研究・植物学教育研究の範となる施設に育てていきたい。
- この節の主要内容は松戸分館の改築報告である。図書館の主柱であるコンテンツに関して、電子資料の積極購入という点はよく分かったが、園芸学研究科との連携部分はよく分からなかった。記入者は、項目 5 に記したように、図書館のコンテンツ（資料）不足を危惧している。予算制約下に関わらず、分館と本館で同じ資料を持つことが無いよう、例えば経済学の分野では、農業経済学・環境経済学の図書は松戸分館に優先配架、それ以外は本館に優先配架し、必要に応じて相互配送という手順を確立していただきたい。
- オープンアクセスへの取組については、様々な困難にも拘わらず十分に前向きな対応

がなされている。しかし、CHORUS 機関ダッシュボード・サービスや Kopernio・Unpaywall などについては、学内への周知が不十分かも知れない。もっとも、OA コンテンツを根本的にもっと増やすことが、まず必要ではあろう。

- オープンアクセス化したジャーナルのリポジトリへの登録（書誌情報と本文参照先）を徹底する。
- 各種サービスや学習支援デスクなどは、今後、オンラインと対面とが両輪の形で、それぞれの利点を活かして発展していくことが望まれる。
- ニューノーマルの視点からの学習環境やサービスの見直し
- アカデミック・リンク松戸の経験を元に、医療系キャンパスである亥鼻分館へのアカデミック・リンク機能の展開を期待する。

３．人的支援

【総評：B+】
学生から大学院生に段階的につながる支援体制を構築し実践してきた点は高く評価できる。「1210 あかりんアワー」や ALSA による学習相談などを安定的に継続して実施していること、また、状況に合わせて EYeL!や EYR!といった新たな支援プログラムも企画・実施してきたことも、大きな成果として評価できる。一方、アクセス数を見る限りまだ十分に認知されていないと思われるものもあり、教員、学生への一層のアプローチやさらなる基本的なニーズ調査が望まれる。また、ALPS プログラムについては、全国の教育関係共同利用拠点として教育・学修支援人材の育成に取り組んでいることを評価する。一方、ALPS プログラムの当初の目的であった図書館職員の能力向上に関しては、どの程度貢献できているか検証することも必要と考える。

■各委員評価

評価指標	A	B	C	D
評価数	6	6		

■評価コメント

- 対象を学部生から大学院生に段階的に拡張するとともに、それぞれの学習の文脈にそった支援体制の枠組みを構築してきたことは特筆して良い。またアカデミック・リンク・センターが教育関係共同利用拠点として、教育・学修支援人材の育成に取り組んでいることは特筆して良い。
- 現在の体制の中で最大限の支援がなされている。
- ALSA、EYR!など、「コンテンツと学習の近接」の理念を有機的に発展させる試みはとても良い。コロナ後の大きな展開を期待する。

- 大学における研究データ管理は難しいが、今後必ず成し遂げていかなくてはならない課題だろう。GakuNin RDM の取組の発展を期待したい。
- 学外から多数の参加者がある ALPS の取組はすばらしい。
- 学生に向けて様々な取り組みを実施している。その際、学生のニーズや使用状況を把握するためのデータ収集を丁寧に行っている。
- 3.1　3.2　幅広い学習支援が行われているが、支援内容等についての学習者のニーズ調査についての記載が限定的である。EYeL!に対するインタビュー調査や、研究・学習支援における教員や院生に対するフォーカス・グループ・インタビューについて記載されているが、学部生に対する基本的学習支援に対するニーズ調査の結果については記載されていない。
- 3.4　ALPS プログラム修了生の、履修後の配置先や活動状況について記載されていない。ALPS プログラム修了生に活躍の場を提供することが望まれる。
- 図書館も厳しい予算制約下にあると思われるが、「あかりんアワー」開催など種々のサービスを提供いただき感謝している。
- 新入生ライブラリーツアーは非常に意義の高い活動である。図書館が様々なサービスを提供していることを知ってもらい、親しみを持ってもらうことができる。あかりんアワーを継続的に開催していることも評価に値する。分野別学習相談は年々利用者が増えていると聞いている。昨年度と今年度はオンラインになってしまったが、対面での復活が望まれる。ALSA-TT による PC サポートデスクも学生にとって有難いサービスだと思われる。
- 院生を対象とした研究・学習支援に関しては、分野間の違いが大きいため、統一したサポートが可能かどうか正直わからないが、はじめての研究英語シリーズや Academic English Consultation は良い活動だと思う。
- ALPS プログラムについては、私の能力不足のため詳細は理解できなかったが、教育・学習支援専門職のスキル養成について、適切な活動を積極的に行っていると思う。
- 多岐にわたる多数の効果的な支援が企画・実施されている。素晴らしい支援がなされているなか、それが十分周知されていなかったり、評価が不十分なものがある。
- 1210 あかりんアワーを長年継続して実施している点が評価できる。
- EYeL!、EYRJ!は大変有用なサイトであり評価できる。
- 教育学修支援人材育成の必要性をふまえたうえでの ALPS プログラムについて、その設置、ルーブリックの開発、それに基づいた体系的プログラムの開発と実施は高く評価できる。
- 学部初年次学生を対象に始まった学習支援が、学部高年次学生、更に大学院生へ学習・研究支援へと発展してきたことはおおいに評価できる。特に最近では、大学院生への研究支援体制の充実が進んでいる。
- ALPS プログラムは、「教育・学修支援専門職」の確立に向けて、様々な新たな取り組

みを開発・実践している。特に、履修証明プログラムは、全国から履修生が参加して3 期で 84 名の修了者を輩出している点、並びに CEREAL 発足におおきな役割を果たした点が、高く評価できる。ただ、対象が社会人であることによる運営上の課題（開催日時や、対面とオンラインのバランスなど）が散見されるので、今後の更なる改善が望まれる。

- 1 つ 1 つの活動はおおむね良好であると考えられるが、特に 2020 年度以前のアカデミック・リンク・センターの活動は、図書館という場に縛られすぎている感があり、この点が本学のマルチキャンパスという特性と相俟って、全学としての人的支援におけるアカデミック・リンク・センターの役割を限定してしまったのではないかとも考えられる。物理的な空間にこだわり過ぎるあまり、支援において重要な視点であるアウトリーチや支援対象の利便性、その手段としての ICT の活用やそれを通じた支援の構築が後手に回ってしまっていた可能性もあると考えられる。図書館としては他大学と比較しても先進的な事例であると考えられるが、全学的な取り組みとして見た場合には、改善の余地はあるものと考えられる。
- ALPS プログラムにおいては、当初の目的であった図書館職員の知識・能力の向上に対して、どの程度貢献できているのか、図書館職員をどの程度惹きつけることができているのかという観点からも課題があると考えられる。
- 学部生から院生につながる支援を様々に発見・実践し、継続・見直しを進めている点は評価できる。
- アカデミック・リンク・センター教員と図書館職員が協働して行う学修支援においては、ALSA-LS など安定的な運営ができており、また「知のプロフェッショナル」を掲げた院生支援においては、Encourage YOUR Research!のコンセプトを打ち出し、それに基づいた支援を次々と展開していることは大いに評価できる。これらの支援は千葉大学が掲げるグローバル人材の育成や次世代を担うイノベーションの創出等に貢献するものと思われる。
- ALPS プログラムについては、教育関係共同利用拠点の認定を受け全国的な教育・学修支援専門職養成を実施するというアカデミック・リンク・センターならではの特色ある取り組みと高く評価できる。
- 学習相談の実施自体は今日の大学図書館では珍しいものではなくなったが、セミナー型学習支援企画や PC サポートデスクを含めた層の厚い学習支援が感じられる。オンライン上の学習支援である EYeL!の構築や、大学院生を対象とした研究活動の支援は本学の特長であり、英語セミナー、ミニセミナーのシリーズや Academic English Consultation が継続的に行われていて、背景に部局や学内他部署との連携があることは高く評価できる。また、ALPS プログラムを立ち上げ、教育関係共同利用拠点として高等教育機関の教育・学修支援専門職養成に全国的な貢献を続けていることもユニークな活動である。

■改善に向けての提言

- ガイダンスに関して：前期の講義で、図書館の本に大量の付箋を貼ってきた学生がいたので注意したところ、「サークル活動で図書館職員の方と打ち合わせする時にも同じように付箋を貼って行ったことがあるが、注意されたことは無い。先生の思い違いではないか」と反論された。特に薄い紙を使用するタイプの洋書では、ページに付箋の糊が残り、しばらくしてからページがくっついて破れしまうことがある。記入者はそれで、講義で使用している教科書（自分の本）のかなりのページをダメにしてしまった。記入者が赴任した10年前より、付箋の残った本や書き込みすらある本が目立つようになってきた気がする。学生の利用促進が第1という図書館の方針もあるとは思うが、卒業後に他所で恥をかかないよう、ガイダンスで「借りた」本の正しい使い方もご指導いただきたい。
- EYeL!、EYRJ!について、アクセス数を見る限り十分に認知されているといえない。もっと教員に向けてその存在をアピールすべき。
- 新入生へのガイダンスが現状任意となっているが、これからの学生生活に重要なガイダンスなので、必須となるよう検討すべき。
- 図書館内で行うべき活動と入館を必要としない活動の峻別
- より本学の特徴を活かした図書館職員にとって魅力的なALPSプログラムの構築
- 図書館による基本的学習支援については、評価期間中はガイダンス、レファレンスともに右肩下がりの傾向がある。この傾向は全国的なものなのか千葉大学特有のものなのかを分析したうえで、アカデミック・リンク・センターと協働する特色ある図書館としてアフターコロナに最適な支援について再検討することも必要かと思われる。

■その他中項目に対する評価・提言・コメント等

- 3.1.1　附属図書館によるガイダンスが日本語および英語で実施されているが、その他の言語（例：中国語）によるガイダンス実施のニーズがあるかの確認が必要だと思われる。
- 多様な人的支援が行われていることはわかるが、個々の取組みの成果・効果と課題について、どのように考えているのかがわからない。
- 3.3.6 に RLA 育成方法の検討を行なったとされているが、そのことは全学的にどのような扱いになっているのか。アカデミック・リンク・センターで検討を行なったことに留まっているのか、全学的に展開さている／展開される計画があるのかによって、その位置付けは変わってくるので、全学的な位置付けについても説明をしてもらいたい。
- 3.3.8 研究データ管理基盤の検討について、Gakunin RDM の本学における利用体制を整える必要がある。
- 松戸キャンパスの領域別学習相談は、学生の学習領域（専攻）に着目した点が西千葉

キャンパスの分野別学習相談とは異なる。これは、学部高年次学生や大学院生（特に留学生）などへの支援方法のヒントとなる可能性がある。今後の発展を望みたい。

４．空間整備

【総評：A】
学習環境・情報利用環境調査など利用者の要望をデータとして的確に把握し要望に応えるべくより良い空間整備への継続的な努力がなされていると高く評価する。10 年たっても古びていないコンセプトや快適な空間設計に関しても高く評価ができる。今後はポストコロナを見据えてバーチャルも含めた空間整備の検討が重要となると思われる。加えて、松戸キャンパスに続き亥鼻キャンパスにおいてもアカデミック・リンク機能の展開が望まれる。

■各委員評価

評価指標	A	B	C	D
評価数	8	4		

■評価コメント

- 現在の本学の環境の下で最大限の整備がなされている。
- 本館と松戸は充実が図られた。
- 空間整備に際しても、３のコメントと重なるが、学習状況・情報利用環境調査、図書館への投書など、利用者の要望をデータとして適格に把握し、要望に応えるべく環境整備がなされていると評価できる。
- スマートラーニング対応の収録設備の更新について、人文公共学府の卓越大学院プログラム等と連携し遠隔授業実施体制を強化した点は、今後の人文社会科学のデータサイエンスの一層の推進に向けてもさらなる貢献を期待したい。こうした設備の整備・更新はコロナ対応をスムーズに進めることにも貢献できたと思われる。
- 学生を含む関係者へのニーズ調査に基づいて空間整備を行っている。
- 記入者は、亥鼻分館を訪れたことが無く、松戸分館は改築後に訪れたことが無いので、それぞれの建物については評価できない。本館に関しては、建物の設計・空間利用共に素晴らしく、文句のつけようがない。
- 館内の空間設計やその改善が、たんなるこれまでの経験からではなく、4.2、4.3 に述べられている各種の調査・評価に基づいて継続的に行われている点が評価できる。特定目線の調査だけではなく、教・職・学生の協働による異なる立場からの検討が行われている点が特に評価できる。
- 基本的な環境は十分整備されている。
- 綿密な調査に基づき、学習空間の設計ならびに改善が行われている。

- ①継続的な改善のための検討と実践は高く評価できる。
  ②新型コロナウイルス感染症に対応した検証・取り組みは今後の在り方を考えるうえで極めて重要である。
- 西千葉については、改修等の整備が完了後も教職員で改善のための調査や活動を積極的に行っている。全員が意見交換を行う教職員合同ワークショップにより実際に改善された事項も多く、より良い空間整備への高い意識がうかがえる。
- 松戸分館については、アカデミック・リンク松戸としてリニューアルされ、特に西千葉との格差解消をのぞむ学生の声が大きかっただけに、大きく改善された。亥鼻分館については、大きな改修はないものの、会話可能エリアの整備やIT室の設置などできる範囲で整備を行い、空調改修、LED 化などの基盤整備も含め改善に努めていることを評価する。
- インタビューや各種調査を実施することによって、具体的な環境改善の成果にまでつなげている。教員・職員・学生の協働の結果による環境改善と位置付けられ、ワークショップ実施はそのことを象徴している。コロナ禍においても学生の学習活動を把握する試みが続けられている。
- 西千葉の本館は改修後10年を経過しているが、コンセプト的にも古びていない点は特筆すべきである。しかし同時に、ポストコロナを見越して、バーチャルな学習空間という観点から新たな検討・整備が必要となってきているのも事実である。
- 空間整備もこれは図書館やアカデミック・リンク・センター単独で改善を行うこと以上に、大学全体としての空間整備の課題の上に図書館やアカデミック・リンク・センターの改善があると考えられる。この点で、松戸分館の改築に際しては、まさにこの点が意識されており評価できるが、それ以外の活動においても、この点を重視した図書館に留まらない活動が展開されることを期待したい。
  特に入館者数などは先の「3. 人的支援」の各種サービスと連動する部分であるが、サービスが空間によって制限されているという実態からも重要な指標であるが、増加はしていない状況からは、それらの取組を図書館内に囲い込む必然性に疑問が生じる。加えて、コロナ禍を受けて、利用者の空間の利用の仕方も変化してきているため、それらを踏まえた空間整備も検討される必要がある。

■改善に向けての提言

- 本館、そしてリニューアルの行われた松戸分館に続き、亥鼻分館の体制強化が望まれる。
- 医学系キャンパスである亥鼻分館の充実をどのように図るか。卒業修了後の利用への配慮も大事なのかもしれない。
- 空間整備・学生の自習支援に力を注ぐあまり、5 に記すように、図書館の本務である資料の整備に予算・人的支援が十分に回っていないのではないか、と危惧している。

- 学生の意見についてはアンケート調査や FGI 等を通じて収集されているが、教員・職員 1 人 1 人がどの程度本学全体の空間整備上の課題を認識し、それはどのような方法によってその認識を得ているかについては改善の余地があると考えられる。
- 新型コロナウイルス感染症に対応した検証・取り組みは今後の在り方を考えるうえで極めて重要である。
- 今後はアフターコロナにふさわしい空間や設備について検討を進める必要があるだろう。また、大学の学習・学術および文化の中心としてさらに機能するためには、リアル、オンラインに関わらず人が集う仕掛けも今後必要と思われる。リアル空間においては、例えば、学内の誰もが発信できるブックツリー展示は意外と利用されていない。また、図書館資料の展示も学術的文化的な空間を醸成する上で効果はあると思われる。コロナ後の最適な空間活用とオンライン発信についてさらなる工夫を期待する。

■その他中項目に対する評価・提言・コメント等

- 4.2 の学習空間を改善するための活動が、4.1 の利用状況にどのように影響したのかについて説明が欲しい。4.1.5 については統計情報の提示にとどまっており、それをアカデミック・リンク・センター/附属図書館がどのように考えているのかがわからない（現状で良いと考えているのか、改善が必要と考えているのか)。その上で、4.2 の活動が 4.1 とどのようにつながっているのか、また、4.3 はどのような効果がもたらしたのかを示してもらいたい。
- 4.2.1－2)：「ID を共通暗号化したうえで､」となっているが、こうした調査が実施されていることは、学生に周知されているのだろうか？行動と成績の間の相関は、教育学や行動経済学で大きな関心を呼ぶ分野ではあるが、通常、個人情報保護の観点から個人単位データの入手が大変困難である。学生に周知されており、問題なく利用できるデータであるのなら、できれば高等教育研究機構（教育学部？）との連携を復活させ、教育学分野の研究にも資すように、データをさらに活用した方が良いのではないか？
- 4.1.7 館内設備の利用状況に関連して、コロナ後に向けて、BYOD 対応をどう考えるのか、貸し出しよりも各自の PC が有効に利用できる環境を整える必要がありそう。
- 新型コロナウイルス感染症に対応した検証・取り組みは今後の在り方を考えるうえで極めて重要である。

5．コンテンツ

【総評：B-】
デジタル・コンテンツの公開、LMS による教育学修支援、また電子ジャーナルの整備など、コンテンツの充実を図るための多様な活動を行っていることは高く評価できる。一方、図書館蔵書に関しては、受け入れ冊数が減少傾向にあることが懸念される。予算に関しては

十分な確保がされるよう全学的な支援が求められる。また、貸出冊数は全国の国立大学の平均よりも低く、「授業資料ナビゲータ」や「学生購入希望図書」なども学習状況・情報利用環境調査の結果からは認知度が高くないこともあり、学生の情報利用行動等からそれぞれの取り組みの効果を検証し、改善につなげる必要があると思われる。

■各委員評価

評価指標	A	B	C	D
評価数	6	5		1

■評価コメント

- 図書の受け入れ冊数が減少傾向にあることが懸念される。予算に関しては、事項 1「管理運営」に関わることではあるが、十分な確保がなされるよう、全学的な支援が求められる。
- 現在の体制の中で考えられる範囲のコンテンツ提供がなされている。
- 電子資料の充実は望ましい方向であり、ますます推進いただきたい。
- 授業資料ナビゲータや研究資料ナビゲータなど魅力的な配架がなされている。
- CURATOR 等、電子コンテンツの充実が着実に図られている。
- LMS における教育活動のデジタル化、研究成果の発信、デジタル・コンテンツ利用環境の整備などを積極的に行っている。
- コンテンツの充実を図るための多様な活動を行っている。
- 基本的資料整備については、十分整っている。
- 独自のコンテンツの作成、発信（c-arc）についても、着実に進んでいる。
- 特にデジタル対応に係る取り組みは評価できる。
- 継続的にニーズの調査と、それを踏まえた対応に取り組んでいる。
- アカデミック・リンクの柱としてコンテンツを掲げ、デジタルでの提供、発信、権利処理、また、早くから LMS を運用しデジタル・オンライン化における授業と学修の支援について多岐にわたる活発な活動を行ってきたことは高く評価できる。さらにデジタル・スカラシップという概念の下、「千葉大学学術リソースコレクション：c-arc」や「千葉大学の本棚：cu-Books」を構築・展開し着実にデジタル基盤を築いていると思われる。一方、図書館の資料はこの 5 年間で明らかに紙資料の減少、電子資料の増加の傾向がみられた。それに対応して利用環境整備に努め、電子資料の学外からのアクセス支援や、図書館内の空間や書架を活用した学生の視野を広げ学問への関心を支援する取り組みを積極的に行ってきたことも評価する。
- デジタル・スカラシップの概念を導入し、その下で多彩な取組に成果を上げていることは高く評価できる。c-arc での IIIF 対応データの整備やコレクションに理系の研究データを含むこと、リポジトリにおける DOI の付与や cu-Books の構築など先進的な取

組である。図書館蔵書においても学生の関心を広げる多様な取組がなされており、除籍を活発に行っていることも図書館の有限な書架を有効活用する意味で評価できる。

- 50 代後半の記入者にとっては、コンテンツこそ図書館の最重要機能・役割であり、それが資料の第 5 項目になっていること自体、理解することが難しい。まず資料（本）あっての図書館であり、その付随活動としての自習支援ではないだろうか？

  1) 5 の 2 段落目 「…「デジタル・スカラシップ」という国内では新しい概念を掲げて、…」。「世界的には一般的になりつつある…」とのことだが、今までも継続して行われてきた資料の電子化と何が異なるのか、よく分からなかった。

  2) 5.1.1 の 3 行目「時日の経過によって利用価値を失った図書を除却」。記入者が 10 年前に千葉大に赴任した際に驚いたのは、図書館がかなりの勢いで貴重な本を廃棄することであった。「時日の経過によって利用価値を失った」は、「古いから価値を失った」とも読め、歴史の検証を伴うことが多い社会科学分野では受け入れ難い考え方である。廃棄予定は、パソコン解説書等に絞っては？

- 以上まとめると、「資料整備方針を再検討していただきたい」である。記入者は、千葉大が研究大学ではなく、図書館の役割も学部教育に重点がある、という前提は理解している。そうであっても、文系の多くの専門分野で基本学術誌の購読すらできなくなっている中で、資料の重複購入（例：授業資料ナビゲータ）やベストセラー小説の配架を見るのは理解できない。学部教育重点機能は、短い貸出期間で十分に果たせているのではないだろうか？資料は大学にあるか無いかが問題なのであり、何冊も揃える必要はない。

- 各種の優れた研究・教育・学修のためのツールが存在しているなか、デジタル・スカラシップにおける教育研究基盤は単独のツールで構成されうるものではなく、その領域・分野・対象に適したツール群から必要なものを選択し使いこなすことで築かれるものであり、そのための人的支援が重要である。そのうえで、それぞれ固有の環境に対応した利用価値の高い独自のツールを提供・開発することも重要であり、Moodle や HLS 動画配信、c-arc、cu-Books などはそれに相当する。

- おおむね良好であり、c-arc などの技術を活用した取組などは特筆すべき点も多い。一方で、以下の点に課題があると考えられる。

  （1）5.1.2 の貸出冊数という点では学生が在学中に一度も図書館の本を借りないという状況も実態として確認される。専門分野の特性もあるが、学生の情報利用行動及びアウトリーチの視点も含めて、それぞれの取組の効果等を検証し、改善につなげる必要がある。

  （2）千葉大学学習状況・情報利用環境調査の結果を見る限り、「授業資料ナビ」「学生購入希望図書」「文献取り寄せ」等の利用は学生全体の 1 割に満たない水準である。どのようにコンテンツの利用に結び付けるかについては検討の必要がある。

  （3）コンテンツ制作支援については、学生を対象とした学修支援なのか、教員を対

象とした教育支援なのか、によってもその在り方は変わり得るが、ミニスタジオや動画収録等については、コロナ禍を受けたメディア授業の進展とともに、活動内容の見直し等も検討される必要がある。

■改善に向けての提言

- 近年、研究室で購入された図書等がリスト化されておらず、ユニバーシティ・リソースとして課題がある。
- デジタル・スカラシップの基盤構築には人的支援との深い連携が必要である。
- c-arc は IIIF 画像だけでなく、その他の学術リソースの対応へ発展すべきである。
- 図書館やアカデミック・リンク・センターの活動実態以上に、それらの活動が学生の学修活動や教員の教育活動の実態にどのように結びついているのかが重要であり、この点から活動の改善が行われるべきである。
- 上記で評価した学生の関心を喚起する取り組みは、紙資料があり書架上にあることを前提としている。今後ますます電子資料に比重が高まっていく中で、学生へどのように電子の資料を届けるかの工夫が必要かと思われる。

■その他中項目に対する評価・提言・コメント等

- 世界的に問題となっている電子ジャーナルの高騰への対応について、予算の制約もあり困難も多いことと承知しているが、国内外の情報収集や学内での調整などにおいて、ぜひ主導的な役割を担って課題解決に尽力していただきたい。
- コンテンツについて、色々な取り組みを行なっていることはわかるが、それぞれやっているという記述で、それがどのように利用されているのか/効果があるのかがわからない。また、記載箇所によって記述内容に精粗が見られる（例えば、一例として、研究資料ナビゲータは数量が示されているが、授業資料ナビゲータはそれがないなど）。可能であれば、それぞれの取り組み内容について、内容と実績（数量的な成果があるものは数量）とその効果がわかるような各事業で共通の記載内容にしてもらいたい。
- 5.2.1 c-arc、5.2.3 cu-Books のコンテンツ生成・管理部分の今後の在り方については検討が必要である。
- c-arc の充実が期待される。また、活用方法についての事例紹介や、あらたな利用方法の開発（AI を活用した検索や分析など）が望まれる。

6．教育基盤の支援

【総評：B】
IR 活動として新入生から卒業生まで様々な段階での調査・分析を行っていることは高く評価できる。ただし学習内容や学習成果についての分析等のさらなる充実が望まれる。また、

コロナ禍の中で急速に高まったオンライン教育基盤の維持管理と様様な支援活動をスマートオフィスとの協働の下で実施してきたことは高く評価できる。

■各委員評価

評価指標	A	B	C	D
評価数	5	7		

■評価コメント

- 昨年来のコロナ禍において、スマートオフィスとの協働の下でオンライン教育基盤の維持管理と様々な支援活動を行ってきたことは特筆すべき点である。
- COVID-19 感染拡大による止むを得ない状況下でもオンラインでの活動を積極的に導入し、かえって支援が広げられた。
- 全体として、教育部門との連携がよく図られている。
- ICT 基盤の整備が進み、運用が急速に展開している。
- IR の活動として、学生へのアンケートの設計・実施、アラムナイ部門との連携、教員アンケートの実施など、多くの調査を企画・実施し、分析データに基づいた環境整備につなげている点が評価できる。
- スマートラーニングの推進について、コロナ対応で必要性が緊急に高まったことで対応に追われて大変だったと思われるが、全学的なメディア授業の実施に多大な貢献があった。
- 教育の ICT 化推進に関して、重要な役割を担っている Moodle の運用・機能強化・クラウド化の取り組みについて評価できる。
- ICT 基盤の整備については、Moodle の普及、利用者支援体制の構築、動画配信機能の拡充など、おおいに進展が認められる。
- 教育 IR に関しては各種の調査及びコロナ禍における調査が着実に行われており、安定した運用が図られている。教育 ICT に関しては、全学的な教育基盤の構築に努力されている。特にコロナ禍においては、その時々の状況に対応して、各種ツールの導入・サポート、クラウド化など短い期間に多くの舵取りが行われ最適化に努めているところが高く評価できる。また、Moodle 動画再生機能を拡張し、動画視聴管理と視聴環境の改善を図り、メディア授業の運用において教員、学生双方に有益な環境を構築したことは大きな貢献だったと思われる。
- IR 活動において、学生・卒業生・教員それぞれに継続的な調査がなされ、その分析やデータが全学のみならず依頼のあった部局にも提供され活用されていることは評価できる。ICT 基盤の整備と運用、スマートラーニングの推進においてもコロナ前から進めていたからこそコロナによる激動にも対応できたものと考えられる。
- 6.1.2　IR 活動として、入学時アンケート、学習状況・情報利用環境調査、卒業生アン

ケートなど、様々な段階での調査・分析を行っていることは評価できる。ただし、卒業生アンケートの回答数が少なく、将来的な改善に向けての対応が必要である。また、学部生の学習内容や学修成果（成績など）についての分析が行われておらず、これらを含む IR 活動の充実が望まれる。

- Moodleのクラウド化に伴い、ハードウェアの管理については状況が改善されたものの、クラウドも運用管理が必要であり、その安定した運用のための体制づくりが必要である。
- IR・FD・SD 連携部門の活動については、アンケートの実施や様々な FD の実施など、一定の評価はできる。ただ、調査の回収率が低い点、調査結果の分析・フィードバックが十分とは言えない点など、課題も認められる。
- おおむね良好であり、全学的な基盤としても重要な活動であると考えられる。一方で、以下の点に課題があると考えられる。

  （1）IR においてはアンケートを所管する事務が様々であり、一体的な IR の活動の障壁になっている可能性がある。

  （2）Moodle は ALC、Google Workspace はスマートオフィス、Microsoft365 は情報企画課というように、本学のシステムは様々な部局が管理しており、システムごとに ID・PW が異なる、学生・教員・職員といった立場によって使用するシステムが異なる、システムによって問い合わせ先が異なるなど、このことが利用者に混乱や負担を掛ける構造になっている。Single Sign-On の導入など、全学的に利用者の視点からより効率的な在り方を検討すべきである。
- 活動内容、成果とアカデミック・リンク・センター/図書館の目的や目標との関連性が見えてこない。

■改善に向けての提言

- オンラインのアンケートについては、回答者を特定できない形での回答管理を行うことで未回答者への催促を行い、回答率を上げることを検討する。
- （1）に関しては、アンケートの主体が様々であることは避けられない部分もあるが、それらを IR として統括する事務担当者を設置するなどの対応が考えられる。

  （2）に関しては、スマートオフィスと有機的な連携や統合も視野に入れ、より統合的な運用が目指されるべきである。
- 2020 年度は予期せぬ新型コロナウイルス感染拡大により、計画してきたスマートラーニングの推進が一斉スタートとなったが、この経験を元に、より効率化・最適化を目指した組織体制、運用体制の整備が期待される。

■その他中項目に対する評価・提言・コメント等

- アカデミック・リンク・センター内に置かれている各専門委員会の運営について、委

員構成がわからないため、専門委員会に対して、アカデミック・リンク・センター関係者がどのような役割を果たしているのかがわからない。専門委員会の委員構成を示すとともに、その中でアカデミック・リンク・センター専任教員・ 各部門が果たしている役割やアカデミック・リンク・センターにこれらの委員会が置かれていることの全学的な効果（他の全学的委員会や諸会議との関係等）を説明してほしい。

- 6.2.4 のスマートラーニングの推進として、スマートオフィスについての説明、コロナ禍での対応が説明されている。ただ、スマートオフィス、スマートラーニングの推進についてここで扱うのであれば、アカデミック・リンク・センターとの人的関わり、スマートオフィスの意思決定プロセス・実務プロセスに対するアカデミック・リンク・センター /附属図書館の関与も説明してもらいたい。アカデミック・リンク・センターとのどのような関わりの中で、記載された内容がどのように決まったのかが読み取れないため、アカデミック・リンク・センター／附属図書館の自己点検評価の中に対応状況まで含めて説明されていることの意図がわからない。
- 6.2.5 の卓越大学院プログラムの連携として、２つの拠点がアカデミック・リンク・センター内に置かれていることが説明されているが、アカデミック・リンク・センターの組織にどのように位置づけられているのか、他の箇所で出てこない内容であり、わからない。
- オンラインやオンデマンド授業で蓄積された知見、ノウハウなどを整理・分析して教員にフィードバックされることが望まれる。
- 以下の状況について、追加の説明を求めたい。
  ・本資料からは全体として、これらの活動にどの程度の人員とエフォートが割かれているかを示す資料が欠落している。このため、それらを客観的に示す資料や説明を求めたい。

7. 地域・社会連携

【総評：B】
市民への公開、千葉県内図書館等との連携については着実な実績を上げていると評価できる。一方で地域住民やステークホルダーに対して意見や要望を求めるという方法などでより積極的に地域社会への貢献も模索することも考えられる。また、あかりんアワーなど市民に公開しているイベント等の公開の範囲やそれに合わせた広報も検討すべきであろう。

■各委員評価

評価指標	A	B	C	D
評価数	4	7	1	

■評価コメント

- 概ね良好な活用が図られている。
- 市民を含め、幅広く地域・社会連携を行っている。
- 相互利用サービスや講師派遣など、大学図書館としての役割を果たしている。
- 市民への公開、千葉県内図書館等との連携において、良好な実績を上げている。
- 精力的に行われてきているが、COVID-19 感染拡大により終盤に少し停滞が見られた。
- コロナ対応のため現在は活動が制限されているが、引き続き、継続的に千葉県下の図書館との連携や、市民に開かれた大学図書館としての活動を期待する。
- 5 に記したことの繰り返しであるが、最近の小説に関しては、千葉県立図書館との相互貸借の利用を原則とすべきと考える。
- 市民への公開や、各図書館関係団体への協力の実績について、それが他の大学図書館と比べてどうなのかわからないので評価が難しい。
- 基本的な部分での連携や公開はできており、おおむね良好と考えられるものの、以下の点に課題があると考えられる。

  （1）地域住民との関わりにおいては、あくまで施設の利用やイベントへの参加等の図書館やアカデミック・リンク・センターが実施しているものへの参加という要素に限定されている。この点で地域住民のニーズをどのように把握し、施策に反映しているのかという点や、地域住民が図書館やアカデミック・リンク・センターの活動に主体的に関わったり、運営に参加したりするという活動には至っていない。

  （2）より直接的に、地域や社会連携の観点から、ステークホルダーが図書館やアカデミック・リンク・センターの運営に意見や助言等が行うことができる機会を担保すべきである。
- 既存の形にとどまっている印象である。
- 各種の団体への委員等の派遣は幅広く行われていて、千葉県・千葉市における学術・文化の一つの拠点として本学の占める位置の高さや本学への期待を反映していると考えられる。学外者の登録者数・入館者数・貸出冊数は本館では漸減傾向である。資料の利用希望者に対して公開するという本来の趣旨に沿うようになった結果であればマイナス材料ではないが、検証の機会があるとよい。

■改善に向けての提言

- オンラインの活用による、さらなる活動の拡大に期待する。
- 直接的に委員会の構成員に地域住民の代表者等を含めるという手段以外にも、全学として地域住民と意見交換を行う際に、図書館やアカデミック・リンク・センターの活動に意見を求めるという方法も考えられるため、何かしらの方法によって、より地域住民が図書館やアカデミック・リンク・センターの活動に関与する方法を模索する必要がある。

- コロナを踏まえた上での、地域・社会への貢献・連携も必要ではないか。情報発信の活用も。
- コロナ禍が終息したのちには、市民の図書館利用の再開や市民参加の場の創出を検討してはどうか。図書館/アカデミック・リンク・センターが学術と文化の中心として千葉大学のブランディングの向上に貢献することを期待する。

■その他中項目に対する評価・提言・コメント等

- 1210 あかりんアワーを市民に公開しているが、その案内が中途半端では？
- 以下の状況について、追加の説明を求めたい。
  ・市民等がイベントに参加することを認めているが、その広報はどのように行われているかについて

８．他機関との連携

【総評：A】
国内・海外ともに多様な機関との連携がなされており、高評価に値する。特に CLR のような著作物利用環境整備のための大学間組織の設置・運営を主導してきたことは特筆すべき点である。各種団体への委員の派遣等も盛んにおこなわれており、特に図書館団体の活動には大いに貢献していると思われる。各種団体への貢献や各機関との連携が図書館とアカデミック・リンク・センターの活動にどのようにフィードバックされ、どのような改善があったのかを分析し、より実質的な連携の在り方を模索することが望まれる。

■各委員評価

評価指標	A	B	C	D
評価数	8	4		

■評価コメント

- 著作権法改正にむけての大学の対応について、大学間の連携のなかで、センター長が主導的な役割を果たしたことを高く評価する。
- 他機関との連携は十分に図られていると思われる。
- 国内外を問わず、他機関との協力・連携を幅広く行っている。2018 年著作権法改正への対応は特筆すべき成果であると思われる。
- 国内・海外ともに多様な機関との連携がなされており、高評価に値する。
- 各種団体へ積極的に委員を派遣し、その活動に貢献している点が評価できる。特に、大学学習資源における著作物の円滑な利用を推進している CLR の活動に積極的にかかわり、教育現場における著作物の利用ルール形成に貢献したことはってきたことは高

く評価できる。

- 他大学・機関との連携は、積極的に行われている。
- 海外の大学・機関との連携も進んでいる。
- アカデミック・リンク・センターが事務局となって主宰する「大学学習資源コンソーシアム（CLR)」や、千葉大、お茶大、横国大の 3 大学連携など他機関との連携を積極的に推進し、国際連携も進めていることを評価する。さらに多くの図書館関係団体等への委員の派遣による貢献も高く評価できる。
- 2018 年著作権法改正（第 35 条）はデジタルトランスフォーメーションの進展を背景にした大きな動きであったが、本学アカデミック・リンク・センターが「大学学習資源コンソーシアム」の事務局として、改正施行への対応を円滑に進めることに中心的役割を果たしたことは特筆に値する。そのほか、国内・国外の各機関と積極的に連携して成果を上げつつあることを高く評価したい。
- オンライン教育の進展を見越して CLR のような著作物利用環境整備のための大学間組織の設置・運営を主導してきたことは特筆すべき点である。また、国際連携、国内関係団体への参加も十分なされている。
- 精力的に行われてきているが、COVID-19 感染拡大により終盤に少し停滞が見られた。
- おおむね良好であり、CLR については中心的な活動を行っており、また、シンガポール国立大学図書館の交流協定に基づく短期インターンシップなどは、コロナ禍の影響もあり中止となったことは残念ではあるものの、今後の展開に期待される部分も多い。一方で、その他の連携においては、それらの連携によって図書館やアカデミック・リンク・センターの活動がどのように改善されたのか、については判然としない部分もある。連携が連携のための連携にならないように、図書館やアカデミック・リンク・センターの活動に資するように、より実質的な連携の在り方が検討される必要がある。
- 内容が、参加結果だけでは物足りない。

■改善に向けての提言

- オンラインの活用による、さらなる活動の拡大に期待する。
- 他機関との連携強化は望ましいことではあるが、それが千葉大図書館のコンテンツ調達を減らすことの口実になることは、是非避けていただきたい。現状では、他機関から借りた資料は、取り寄せの日数・貸出延長の困難さを考えると、図書館所蔵の資料の価値とは比べ物にならない。

  将来は、他大学図書館との電子書籍共同購入・即時相互貸借が可能になるのであれば、予算有効活用の観点から非常に望ましい。
- ALPS プログラムへの参加や講師としての登壇、調査協力、図書館職員の能力向上等も含め、連携の実質化が模索されるべきではないかと考えられる。
- 特に、「8.3 各種団体への参加」については、その内容・結果等を内部職員へフィード

バックし、業務改善や資質向上等に反映すべきである。

- 国際連携については、コロナ禍のため中止となった企画もあったが、吉林大学とのオンラインミーティングのようにアフターコロナ型の交流も可能となったので、多くの海外機関との連携を進めることを期待する。

■その他中項目に対する評価・提言・コメント等

- 8.1.1－2）4 段落目の最終行：「利用フローの策定」というのは、確立した業界用語なのであろうか？
- ALPS プログラムにおける国際連携については、米国以外にも、日本と似た環境、状況の国との交流が望まれる。

2021 年度 千葉大学アカデミック・リンク・センター／附属図書館
自己点検・評価／外部評価報告書
2022 年 1 月

編集発行：千葉大学アカデミック・リンク・センター／附属図書館
〒263-8522　千葉市稲毛区弥生町 1-33
Tel. 043-290-2243　Fax. 043-290-2255
https://alc.chiba-u.jp/　https://www.ll.chiba-u.jp/